

郡山遺跡第200次調査

—仙台市あすと長町 21 街区・店舗建設に伴う発掘調査報告書—

2011 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会
株 式 会 社 佐 藤 倉 庫

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。

市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が残っております。当教育委員会といたしましても、先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら次の世代に継承していくけるよう努めているところであります。

本報告書は、多賀城造営以前の陸奥国府と考えられ、国の史跡指定を受けた仙台郡山遺跡官衙遺跡群の西側で整備が進められている「仙台市あすと長町土地区画整理事業」地内で実施された郡山遺跡第200次調査の調査成果をまとめたものです。

平成10年から開始された仙台市あすと長町土地区画整理事業に伴う調査では、古墳時代後期から奈良時代としては、東北地方でも最大級の集落が事業地内にあったことが明らかになり、郡山遺跡に営まれた官衙との関連性も考えられております。

今回の調査は、方四町II期官衙の区画施設である外郭大溝の外側に位置する外溝の西辺と北西コーナー部に近接した場所で行われましたが、竪穴住居跡や溝跡などの遺構が発見され、官衙北西部での土地利用の変遷を考える上で貴重な成果が得られました。区画整理事業に伴う調査の開始から10年を経て、官衙の構造に係わるような遺構の発見だけでなく、これまで未解明であった官衙に前後する時期の周辺での人々の生活も、我々の目の前に姿を現してきております。

当教育委員会といたしましても、発掘調査状況の公開・活用を進めるため、調査の概要を紹介する広報板の掲示や遺跡見学会の開催など、今後もより多くの市民の皆様に興味を持っていただけるような活動を行っていきたいと考えております。そのためにも、今回の調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および調査報告書の刊行にあたり、特に事業者である株式会社佐藤倉庫様には郡山遺跡II期官衙外溝の重要性をご理解いただいた上で建築計画を策定いただきましたなど、調査にご協力いただきました。また、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成23年3月

仙台市教育委員会
教育長 青沼一民

例　　言

1. 本書は、仙台市教育委員会が実施した仙台市あすと長町土地区画整理事業地内での郡山遺跡第200次調査の発掘調査成果についてまとめたものである。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の委託を受け、株式会社シン技術コンサルが行った。
3. 報告書刊行にあたっては、仙台市教育委員会文化財課 工藤信一郎、水野一夫の監理の下、遺物整理から本書の編集にいたるまでの作業は、株式会社シン技術コンサル 長谷川徹が担当した。
4. 本書の執筆については、第1章を工藤、第II～VI章を長谷川が担当した。
5. 調査及び報告書の作成に当たり、株式会社佐藤倉庫よりご協力を賜った。記して、感謝の意を表す次第である。
6. 調査・整理に関する全ての資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 遺構図中の座標系は、日本測地系「平面直角座標第X系」を基準としている。図中及び本文記載の方位北は、全て座標北を基準としている。
2. 本文中の土色の記述には、原則として「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄 1999)を使用している。
3. 調査において検出された遺構については以下の遺構番号を使用し、遺構ごとに略号を付した。

S A : 材木跡	S B : 挖立柱建物跡	S D : 溝跡	S I : 積穴住居跡
S M : 小溝状遺構	S X : 性格不明遺構	P : ピット	
4. 遺構番号については、あすと長町地区で実施された郡山遺跡第180次調査(平成18年度)からの通し番号である。また、一部の遺構については郡山遺跡第167次調査(平成16・17年度)の延長部分であることから、当時の番号をそのまま使用している。
5. 遺構図等の縮尺は、下記の通りである。但し、その縮尺で掲載が困難なものについては、適宜縮尺を変えている。各図にはそれぞれのスケールを付した。
平面図: 1/150・1/60　　断面図: 1/60・1/30
6. 遺構図に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。これ以外のものについては、図中に凡例を個別に付した。



7. 出土遺物の登録には、以下の遺物略号を使用し、遺物ごとに番号を付した。

- | | | |
|-----------------|----------------|---------|
| C : 土師器（非ロクロ調整） | D : 土師器（ロクロ調整） | E : 須恵器 |
| K : 石器・石製品 | N : 金属製品 | P : 土製品 |
8. 遺物実測図の縮尺は、挿図・写真図版ともに1/3で統一してある。
 9. 土器実測図に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。



10. 遺構観察表及び遺物観察表中の（ ）内数値は残存値を示す。

目 次

序 文

例 言

凡 例

第Ⅰ章 調査に至る経過	1
1. 調査事由	1
2. 調査要項	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅲ章 調査の方法と概要	4
第Ⅳ章 基本層序	4
第Ⅴ章 IV a 層上面の検出遺構と出土遺物	5
1. 古代～中世の遺構と遺物	5
(1) 小溝状遺構群	5
(2) 区画施設	7
(3) ピット	7
2. 古墳時代～古代の遺構と遺物	8
(1) 積穴住居跡	9
(2) 掘立柱建物跡	32
(3) 溝跡	33
(4) 区画施設	36
(5) ピット	39
(6) 性格不明遺構	41
3. 出土遺物について	44
第VI章 まとめ	45
写真図版	
報告書抄録	

第Ⅰ章 調査に至る経過

1. 調査事由

仙台市南部の長町地区では、副都心整備事業である「仙台市あすと長町土地区画整理事業」の施行に伴い、長町駅東遺跡・西台畠遺跡及び郡山遺跡の一部を対象として、平成10年から現在まで継続して発掘調査が行われ、古墳時代後期～奈良時代（6世紀末葉から8世紀前葉の時期）を中心とする竪穴住居跡総数500軒近くが発見されている。

また、郡山遺跡では、昭和54年以来継続して発掘調査が行われ、陸奥国府である多賀城に先行する2時期の官衙（Ⅰ期官衙→Ⅱ期官衙）があったことが明らかになっている。

今回の第200次調査は、あすと長町土地区画整理事業地内21街区において株式会社佐藤倉庫により計画された店舗建設に伴い、仙台市教育委員会に事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出されたことに始まる。開発地は郡山遺跡の北西部にあたり、平成17年に行われた第167次調査に伴う遺構確認調査で、Ⅱ期官衙外溝北西コーナー部に伸びる外溝西辺が確認されていた。調査の実施に向けた協議の中で、この外溝の重要性についてご理解いただき、建物配置について外溝を避ける建築計画の策定をいただくなどのご配慮をいただいた。協議の結果発掘調査については、建物部分を対象に実施することになった。

2. 調査要項

遺跡名：郡山遺跡（宮城県遺跡地名番号01003）

所在地：仙台市太白区郡山二丁目

あすと長町土地区画整理事業地内21街区1画地

調査期間：2010年（平成22年）10月12日～2010年（平成22年）12月10日

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会文化財課調査指導係 主任工藤信一郎 主事水野一夫

調査組織：株式会社シン技術コンサル

主任調査員 大島秀俊（10月12日～11月10日） 長谷川徹（11月15日～12月10日）

調査補助員 小林一弘（10月12日～11月10日） 小川朋恵（11月15日～12月10日）

調査面積：300m²

整理期間：2010年（平成22年）12月13日～2011年（平成23年）3月25日

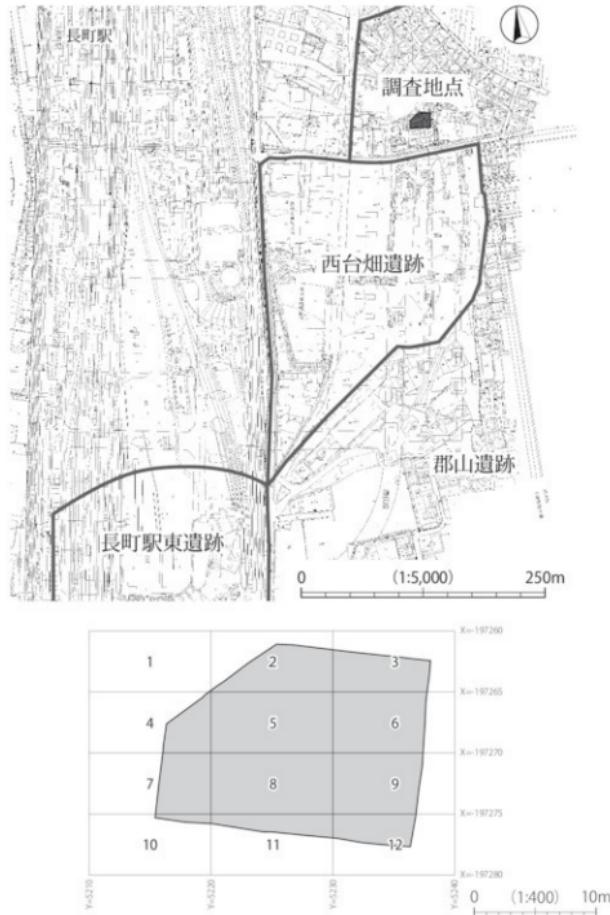
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

郡山遺跡は仙台市の南東部、太白区郡山二丁目～六丁目に所在する遺跡である（第2図）。遺跡の範囲は東西800m、南北900mで、面積は約60万m²に及ぶ。その一部は平成18年に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廐寺跡」として国史跡に指定された。遺跡の時代幅は縄文時代後期から近世に及ぶ。そのうち、官衙は「Ⅰ期官衙」と「Ⅱ期官衙」の2時期があり、Ⅰ期官衙は7世紀中頃～7世紀後半にかけての城柵跡、Ⅱ期官衙は7世紀末～多賀城創建期までの陸奥国府跡と考えられている。

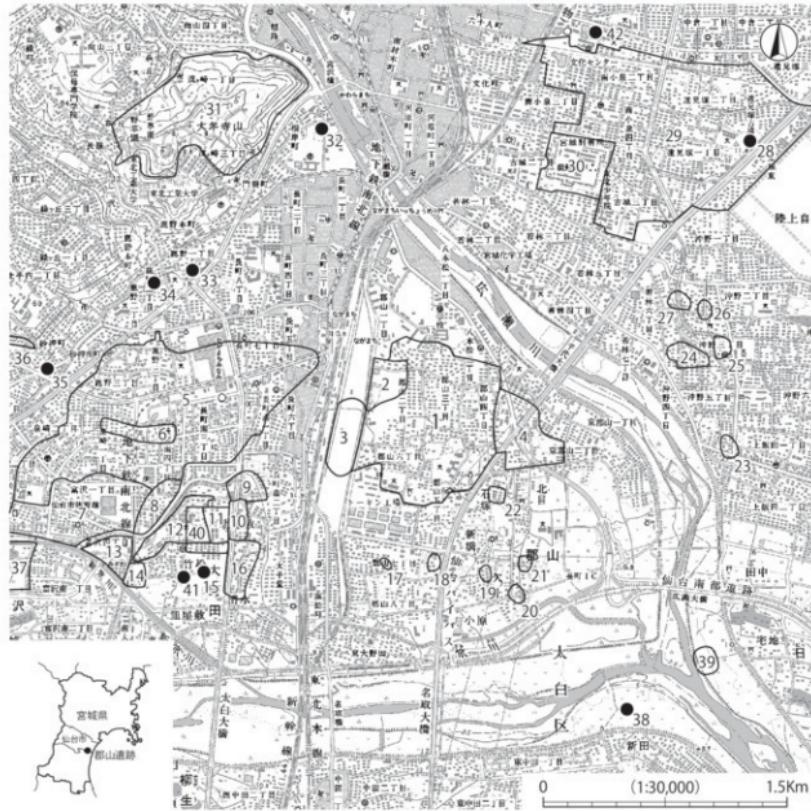
今回の調査地点はJR長町駅から東方約200mに位置する（第1図）。平成16・17年の2度にわたる第167次調査区のほぼ中間地点にあたる。特に平成17年の調査では、Ⅱ期官衙外溝（SD13）の北西コーナーを発見し、外溝北辺の存在を明らかにするなどの成果を上げた。

宮城県中央部の地形は、山形県境沿いに南北に連なる奥羽山脈と、ここより派生する青葉山丘陵・高館丘陵と、東に広がる宮城野海岸平野と呼ばれる沖積平野からなる。この平野は、地理的条件・成因・地質などから地形区分されており、仙台市南部の広瀬川と名取川の合流点の両河川に挟まれた一帯を郡山低地と呼んでおり、遺跡はこの低地の中央からやや東寄りに位置する。北東を流れる広瀬川右岸にあたり、標高 10 m 前後の自然堤防と後背湿地上に立地している。

なお、歴史的環境の詳細については、仙台市文化財調査報告書第 283 集『郡山遺跡発掘調査報告書—総括編（1）—』(2005)、及び第 358 集『郡山遺跡第 144 次調査』(2010a) を参照していただきたい。



第 1 図 調査区位置図・グリッド設定図



国土地理院発行 数値地図 1/25,000「仙台」を使用

番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	郡山遺跡	官衙・寺院	自然堤防・後背湿地	縄文～中期	22	矢来遺跡	衙舎地	自然堤防	古墳・古代
2	西台遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～古墳	23	河原遺跡	盆地地	自然堤防	古墳～平安
3	長町東遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	弥生～中期	24	砂押山遺跡	盆地地	自然堤防	古墳～平安
4	北日城跡	城跡	自然堤防	中期	25	中幡遺跡	盆地地	自然堤防	古墳～平安
5	宮沢遺跡	盆地地・集落跡	後背湿地	旧石器～近世	26	神稚遺跡	盆地地	自然堤防	縄文～平安
6	宮崎遺跡	盆地地	自然堤防	縄文・奈良・平安	27	砂押1号跡	盆地地	自然堤防	古墳～平安
7	山口遺跡	盆地地・水田跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安	28	通見丸古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
8	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	29	南小山遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～中世
9	元岱遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安	30	西林根遺跡	城跡	自然堤防	中世・近世
10	大野遺跡	墓域	自然堤防	縄文・弥生	31	茂ヶ崎城跡	城跡	丘陵	中世
11	袋前遺跡	集落跡・官衙	自然堤防	縄文・平安	32	御塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
12	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	33	一塙古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
13	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	34	二塙古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
14	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	35	砂押古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
15	馬の頭塚	古墳	古墳	36	上ノ内古墳群	城跡・古墳・史跡	丘陵・谷地	古墳	古墳
16	御所山遺跡	集落跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中期	37	道之塚古墳	古墳	自然堤防	中世
17	阿賀遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	38	高木山古墳	古墳	自然堤防	古墳
18	曳ノ上遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	39	日出山古墳	集落跡	河川敷	古墳
19	アツノ上遺跡	小山跡	自然堤防	平安・中世	40	大野官衙遺跡	官衙	自然堤防	古墳～奈良
20	アツノ下遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	41	森ノ上古墳	古墳	自然堤防	古墳
21	アツノ下遺跡	盆地地	自然堤防	古墳～平安	42	法華寺古墳	古墳	自然堤防	古墳

第2図 郡山遺跡及び周辺の遺跡位置図

第Ⅲ章 調査の方法と概要

調査地は郡山遺跡第167次調査区と接する。2年次にわたる調査では郡山Ⅱ期官衙外溝のほか多数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが見つかっており、今回の調査でも同様の遺構が検出されることがほぼ確実視されていた。設定された調査区は店舗建設部分に該当する東西22×南北16m程の範囲で、面積は約300m²を測る。調査区の西側と北側は都市計画道路「長町八木山線」ほか現況道路に面しており、このため単管パイプと標識ロープ、A型バリケード等による周囲の安全柵設置から作業は開始された。

表土除去はバッカホウ（パケット土量0.4m³）を使用し、西側から着手した。表土下約50cm前後で基本層IV層の上面が現れ、同時に遺構プランも検出されたため、これを遺構検出面として東側に範囲を広げていった。

続く遺構検出と遺構調査は全て手作業を行った。時期的に新しいとみられる小溝状遺構群や一部のピットなどを先行して調査し、その後検出面をスコップ等で若干削り下げ、竪穴住居跡等古代の遺構を検出・調査した。なお、検出面はシルト質の粘性土壤で、乾燥による硬化や崩落が進行しやすいため、散水のほか作業時間中もシート保護を適宜実施してその対策とした。

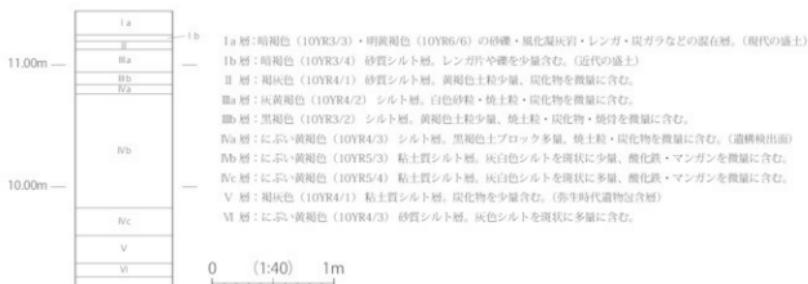
遺構図面作成については、平面図がトータルステーションを用いた器械実測を基本とし、このうち遺物微細図をデジタルカメラによる写真図化で補った。断面図については全て手実測で実施し、これをスキャナーでデジタル化して修正等の加工を行った。

写真記録については、35mmモノクロネガ・同カラーリバーサルの2種類のフィルムカメラによる撮影を基本とし、補足としてデジタルカメラによる撮影も実施した。

第Ⅳ章 基本層序

基本層序の観察は、比較的堆積状況の良好だった調査区南壁とSD15の下層部分で行った。現地表から2.2m程の深さまで観察し、I～VI層に大別された。このうち遺構検出面としたのはIVa層上面であるが、近代～現代の盛土であるI層が調査区内全体を厚く覆い、その侵食がIVa層にまで達している状況が随所で認められている。

各層の詳細については第3図を参照されたい。



第3図 基本土層柱状図

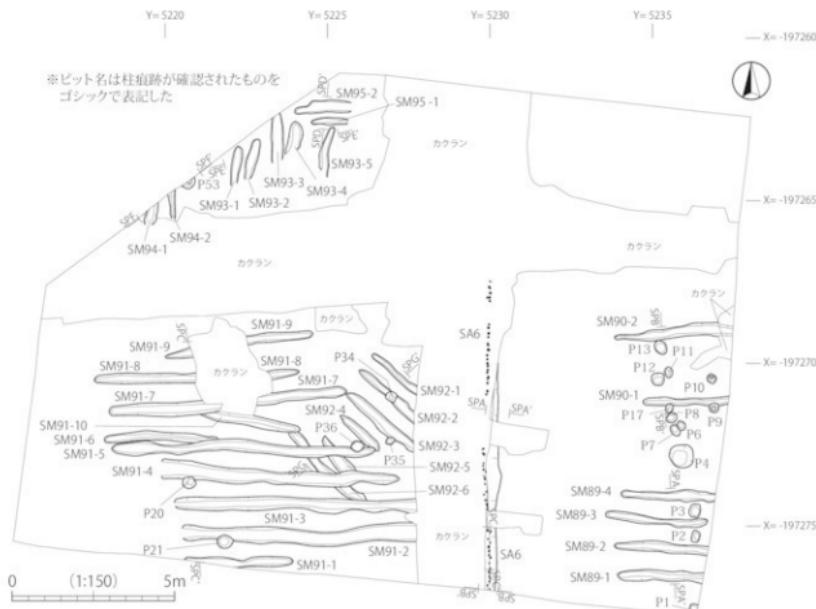
第V章 IVa層上面の検出遺構と出土遺物

1. 古代～中世の遺構と遺物

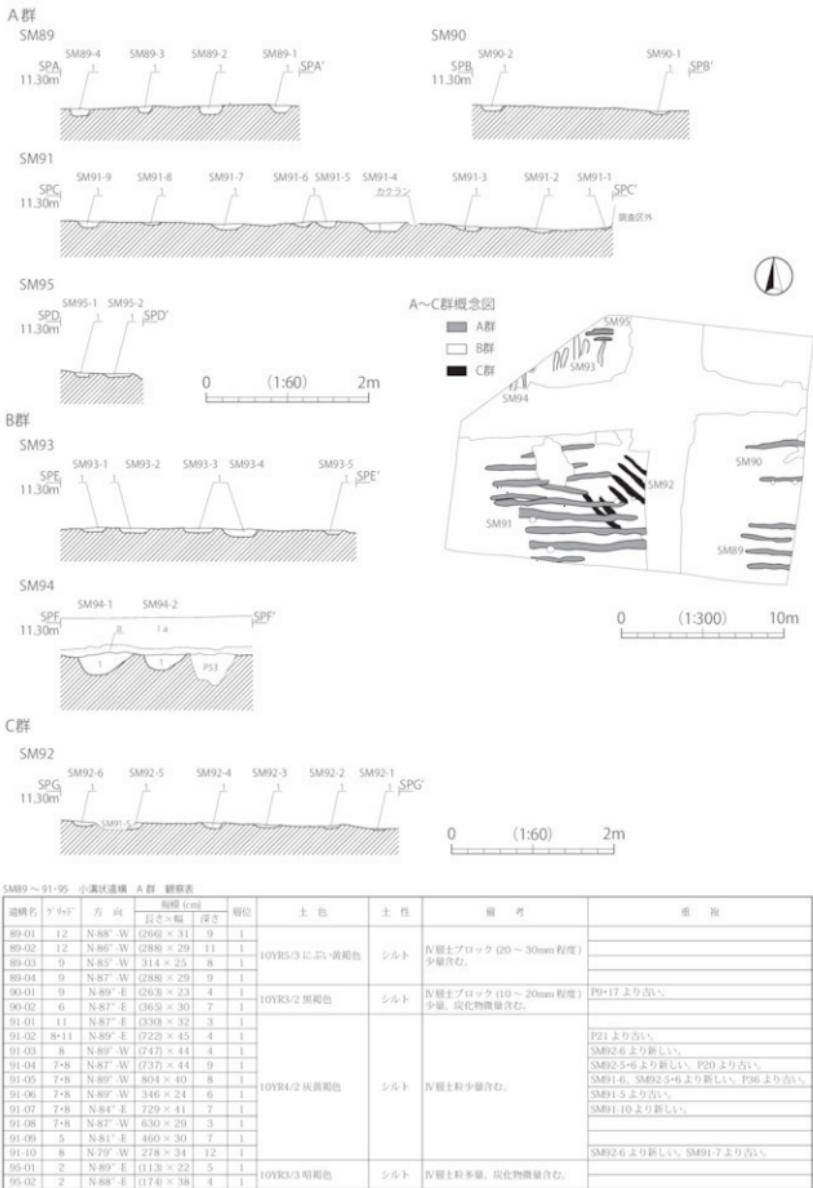
今回の遺構検出は基本層IV a層上面で実施しており、同一面に複数時期の遺構が混在して検出されるかたちとなつた。このうち小溝状遺構の全てと杭列1条、さらに一部のピットが遺構内堆積土や重複関係などから比較的新しい時期の遺構と判断された。いずれも共伴遺物に乏しく、漠然とした時期大別に留まるが、古墳時代～古代の遺構と区別して報告する。

(1) 小溝状遺構群 (第4・5図)

耕作痕と捉えられる遺構であり、SM89～95の7単位31条が検出された。掘削方向からA～Cの3群に大別され、A群には概ね東西を向くSM89～91・95の4単位18条が、B群には南北方向のSM93・94の2単位7条が、C群には南東～北西と傾きをもつSM92の1単位6条がそれぞれ比定される。このうちSM91とSM92には重複関係があり、少なくともA群がC群に後出すると理解される。また、B群に属すSM94の断面観察では基本層II層直下に検出層位が認められており、これらの掘削が中世以降であることを示唆している。



第4図 古代～中世遺構配置図



第5図 小溝状遺構断面図

(1) 穫穴住居跡

SI13 穫穴住居跡（第8・9図）

【位置・確認】平成 16 年の第 167 次調査でも発見されていた遺構で、今年度の調査で東側を検出した。調査区南西部、7・8 グリッドに位置する。北東側約 1/3 が検出された。南側が調査区外にかかる。

【重複】 SI43、SB16、SD22 よりも古く、平成 16 年調査区では SI12・14 よりも新しい住居である。

【規模・形態】 検出された範囲の規模は、南北 390cm、東西は平成 16 年調査区検出部分から 492cm を測る。北西コーナーの状況から平面形状は方形ないしは隅丸方形を呈するものと推測する。

【方向】 東壁基準で N=26°-W である。

【堆積土】 9 層に分層されるが、6 層は平成 16 年調査部分のみに堆積する層である。1～5 層は住居堆積土、7 層は周溝内堆積土、8 層は貼り床、9 層は掘り方堆積土である。IV 層土ブロックや焼土粒等を含む。

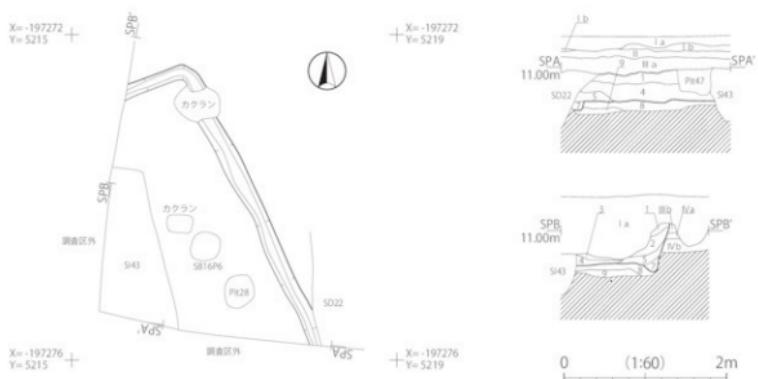
【壁面】 検出された範囲の壁面は外傾して立ち上がり、残存する壁高は北壁で 49cm、東壁で 11cm を測る。

【床面】 8 層上面を床面とし、検出された範囲では僅かな起伏が認められるが概ね平坦である。

【周溝】 検出された範囲では壁面に沿って全周する。規模は幅 17～25cm、深さ 10～24cm を測り、断面形状は逆台形を呈する。

【掘り方】 検出された範囲では中央部が台形状に高まり、その周囲が 2～9cm 剥ぎ込まれている。

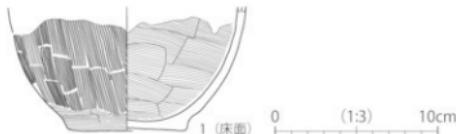
【出土遺物】 土師器壺 2 点、甕 1 点を図示した。



SI13 穫穴住居跡 堆積土記表

部 位	層位	土 性	特 記
住居堆積土	1 IOYR4/3 に少し黄褐色	シルト	IV 剥土ブロック (6mm 程度) 多量、炭化物少量含む。
	2 IOYR3/3 喀斯特色	シルト	IV 剥土料少量、青灰色粘土ブロック (5mm 程度) 鮫摺含む。
	3 IOYR3/3 喀斯特色	シルト	炭化物少量含む。
	4 IOYR3/4 喀斯特色	シルト	砂土料少量、炭化物微量含む。
	5 IOYR3/4 に少し黄褐色	シルト	IV 剥土ブロック (10～15mm 程度) 多量含む。
周溝	7 IOYR3/4 喀斯特色	シルト	IV 剥土ブロック (6mm 程度) 少量含む。
貼り床	8 IOYR4/4 黄褐色	シルト	IV 剥土料、焼土粘土料少量含む。
住居堆積土	9 IOYR5/6 黄褐色	シルト	IV 剥土ブロック (10～15mm 程度) 多量含む。

第8図 SI13 穫穴住居跡



SI36 穫穴住居跡出土遺物調査表

図版番号	登録番号	出土地点	相位	種別	器種	法量(cm)			外面調整	内面調整	備考	写真回数
						口径	底径	高さ				
1	C-4	床面	土師器	底	-	7.3	-	-	体部ハケヌ、底部ヘラナデ・ヨコナデ	体部ヘラナデ	-	9-4

第 11 図 SI36 穫穴住居跡出土遺物

【壁面】 検出された範囲の壁面は外傾あるいは直立気味に立ち上がる。調査区南壁での壁高は 25cm を測り、残存する壁高は 6 ~ 12cm である。

【床面】 9 層上面を床面とする。やや起伏がみられるが、概ね平坦である。

【周溝】 検出された範囲においては、カマド東側で途切れるが北・東壁面に沿い確認される。規模は幅 6 ~ 15cm、深さ 6 ~ 12cm を測り、断面形状は U 字形を呈する。

【カマド】 北壁中央部に位置する。カマドの掘り方が検出された。掘り方の規模は幅 26cm、奥行き 84cm、奥壁高 17cm を測る。カマドの南側に 20 × 30cm の被熱部分が認められた。袖部・煙道部とともに検出されなかった。

【掘り方】 検出された範囲では概ね平坦で、北東コーナー付近が 5cm 程の窪みとなる。底面には工具痕が顕著に認められた。

【出土遺物】 土師器壺 1 点を図示した。

SI37 穫穴住居跡（第 12 図）

【位置・確認】 調査区南部の 11 グリッドに位置する。北西側が検出された。南側が調査区外にかかり、東側が概乱により失われている。

【重複】 SI41 よりも新しい住居である。

【規模・形態】 検出された範囲の規模は、南北 125cm、東西 170cm を測る。平面形状は方形ないしは隅丸方形を呈するものと推測する。

【方向】 西壁基準で N—3°—E である。

【堆積土】 5 層に分層された。1 ~ 3 層は住居堆積土で IV 層土等が含まれ、4 ~ 5 層は掘り方堆積土で IV 層土や黒色土が混合する。

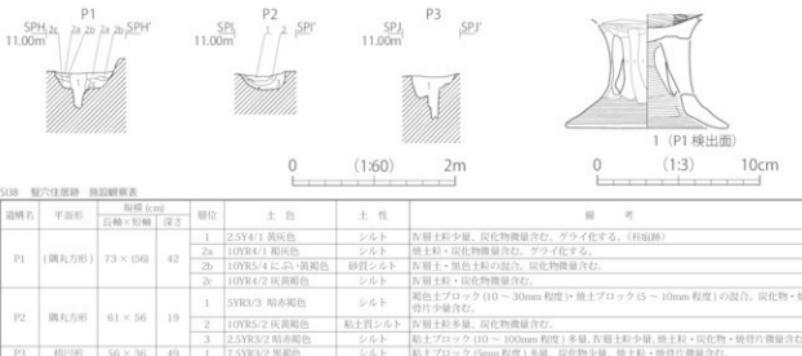
【壁面】 検出された範囲の壁面は直立気味に立ち上がる。調査区南壁での壁高は 32cm を測り、残存する壁高は 19 ~ 22cm である。

【床面】 4 ~ 5 层上面を床面とする。住居跡の北西コーナーの壁面向かい緩やかに傾斜する。

【柱穴】 3 基検出された。P 1 は大型のピットで住居北西コーナーの床面で検出された。P 2 は P 3 に重複して検出される。P 3 は検出面で焼土ブロックがレンズ状に堆積する。いずれも柱痕跡が認められず、柱穴であるか否かは不明である。

【掘り方】 検出された範囲では僅かな起伏が見られるが概ね平坦である。

【出土遺物】 土師器壺 1 点を図示した。



第 14 図 SI38 壁穴住居跡 (2)・同出土遺物

【カマド】北壁中央部に位置し、壁面にはほぼ直交して付設される。袖部の規模は、西袖が長さ 71cm、幅 30 ~ 35cm、東袖が長さ 77cm、幅 25 ~ 33cm を測る北壁に直交して伸びる。燃焼部の規模は幅 60 ~ 62cm、奥行き 87cm を測る。西壁は内溝し、東壁は直立、奥壁は外傾して立ち上がる。底面は奥壁に向かい緩やかに傾斜し、ほぼ中央に 29 × 30cm を測る被熱部分を認める。煙道部の規模は長さ 174cm、幅 29 ~ 48cm、深さ 12 ~ 23cm を測る。壁は直立て立ち上がり、底面には煙出し部に向かって緩やかに傾斜する。また、底面には長軸方向に幅 15 ~ 25cm、深さ 5 ~ 8cm の浅い掘り込みが見られる。煙道部の造り替えの可能性が考えられる。

【掘り方】検出された範囲では中央が台形状に高まり、その周囲が 3 ~ 6cm 掘り込まれている。

【出土遺物】土師器高環 1 点を図示した。

SI39 壁穴住居跡（第 15 図）

【位置・確認】調査区北東部 3・6 グリッドに位置する。後世の遺構と、擾乱により北と南側が失われている。住居中央付近の床面や西側掘り方の一部が検出された。また東側は平成 17 年の調査区にかかるが、同調査区部分では擾乱により削平され遺構は検出されていない。

【重複】SI40、SD15・24 より古い住居である。

【規模・形態】検出された範囲の規模は、南北 230cm、東西 350cm を測る。掘り方で西壁の一部を検出したに過ぎず形態は不明である。

【方向】西壁基準で N-25°-E である。

【堆積土】4 層に分層された。1 層は住居堆積土で調査区東壁のみ見られ、厚さ 13cm 程度である。2 層は貼り床、3・4 層は掘り方堆積土で IV 層土ブロックが含まれる。

【壁面】後世の遺構や擾乱のため不明である。

【床面】2 层上面を床面とする。検出された範囲では概ね平坦である。

【掘り方】検出された範囲では中央部が台形状に高まり、その周囲が 6 ~ 15cm 掘り込まれている。

【出土遺物】掘り方土中から土師器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



SI39 積穴住居跡 堆積土記表

部 位	層位	土 色	土 性	相 手	
				IV層土粒少量、堆積土微混含む。	黒色土ミナリ状に含む。
住居堆積土	1	10YR4/4 暗色	シルト		
貼り床	2	10YR7/2 に近い黄褐色	粘土質シルト		
住居裏方	3	10YR3/1 黒褐色	シルト	IV層土ブロック（～20mm程度）多量、灰白色粘土・堆積土粒少量、現化物微混含む。	
	4	10YR5/6 黄褐色	砂質シルト		黒色土粒少量含む。

第 15 図 SI39 積穴住居跡

SI40 積穴住居跡（第 16・17 図）

【位置・確認】調査区北東部 3・6 グリッドに位置する。住居の北半は擾乱により失われ、北壁付近の掘り方が検出される。東側は SD15 との重複部分で一部が検出された。

【重複】 SI39、SD15・24 よりも新しい住居である。

【規模・形態】検出された範囲の規模は、南北 424cm、東西 403cm を測る。検出された状況から平面形状は方形ないしは隅丸方形を呈するものと推測する。

【方向】西壁基準で N—7°—E である。

【堆積土】2 層に分層された。1 層は IV 層土ブロックを多量に含む住居堆積土、2 層は IV 層土と黒色土が混合する掘り方堆積土である。

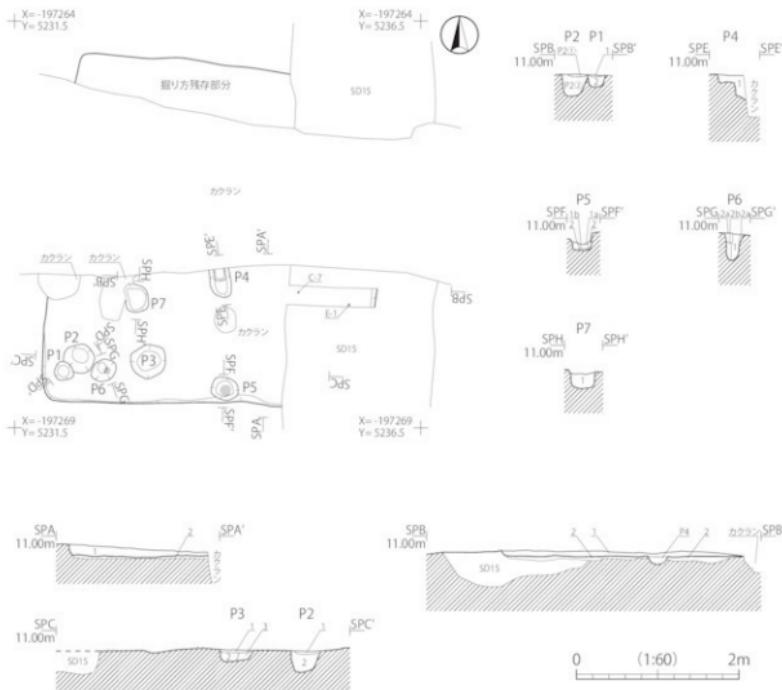
【壁面】検出された範囲の壁面は外傾して立ち上がり、南壁は僅かに内湾して立ち上がる。残存する壁高は 6～12cm を測る。

【床面】2 層上面を床面とする。僅かな起伏が認められるが概ね平坦である。

【柱穴】床面では P 1～4、掘り方では P 5～7 の 7 箇所検出された。P 5・6 には柱痕跡が認められ、検出された位置から壁柱穴あるいは補助柱穴の可能性が考えられる。

【掘り方】検出した範囲では僅かな起伏が認められる。北部に向かい傾斜する。

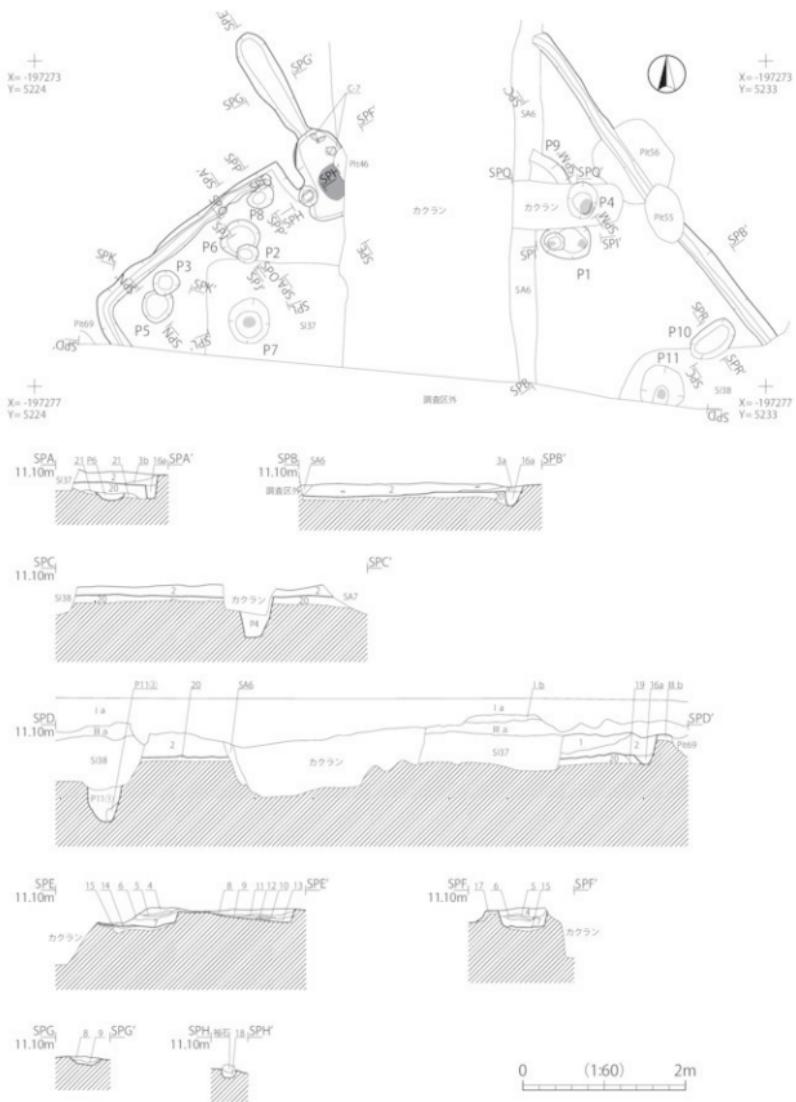
【出土遺物】土師器甕 1 点、須恵器高台付环 1 点、鉄釘 1 点を示した。



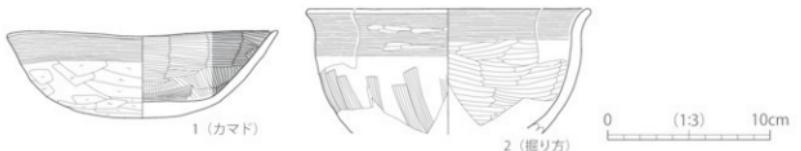
SI40 豊穴住居跡 堆積土跡記録

測定点	層位	土 性	土 性	面 号	
				住居堆積土	住居廻り土
P1	円形	1 10YR4/2 黄褐色 2 10YR4/4 褐色	シルト 砂質シルト	10YR4/2 黄褐色 10YR4/4 黑褐色	10YR4/2 黄褐色 10YR4/4 黑褐色
P2	円形	38 × 35	1 10YR5/3 に5-5 黄褐色 2 10YR4/2 黄褐色	シルト 砂質シルト	10YR5/3 に5-5 黄褐色 10YR4/2 黄褐色
P3	円形	43 × 41	1 10YR4/3 に5-5 黄褐色 2 10YR5/6 黑褐色 3 10YR5/6 黑褐色	シルト 砂質シルト 砂質シルト	10YR4/3 に5-5 黄褐色 10YR5/6 黑褐色 10YR5/6 黑褐色
P4	(椭円形)	36 × 26	1 10YR4/2 黄褐色 1a 10YR3/2 黑褐色	シルト シルト	10YR4/2 黄褐色 10YR3/2 黑褐色
P5	楕円形	34 × 28	1 10YR3/2 黑褐色 2 10YR4/2 黄褐色 3 10YR3/2 黑褐色	シルト 砂質シルト 砂質シルト	10YR3/2 黑褐色 10YR4/2 黄褐色 10YR3/2 黑褐色
P6	楕円形	32 × 25	2a 10YR5/6 黄褐色 2b 10YR4/2 黄褐色	砂質シルト 砂質シルト	10YR5/6 黄褐色 10YR4/2 黄褐色
P7	不規方型	37 × 29	1 10YR3/3 黄褐色	シルト	10YR3/3 黄褐色

第 16 図 SI40 豊穴住居跡



第 18 図 SI41 穫穴住居跡 (1)



SI41 穫穴住居跡出土遺物観察表

測量番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	写真回数
1	C-8	カマド	堆積土	土器部	环	口径 16.6 底径 5.3 器高 -	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ハラミガキ、黒色処理	-	9.10
2	C-9	掘り方	堆積土	土器部	环	(17.6) -	口縁部ヘラミガキ、体部ヘナナデ	ハラミガキ	-	9.11

第20図 SI41 穫穴住居跡出土遺物

SI42A 穫穴住居跡（第21～27図）

【位置・確認】2・4・5・7・8グリッドに位置する。東壁中央から北西コーナーにかけて擾乱を受け失われている。また、カマド付近は擾乱やP61などの影響をうけている。

【重複】SD25、SX3・4・6より新しく、SB16-P3、SX7よりも古い住居である。SI42住居は、3期にわたり拡張が行われており、SI42C→SI42B→SI42Aとして報告する。

【規模・形態】検出された範囲の規模は、南北726cm、東西750cmを測る。平面形状は方形を呈する。

【方向】カマド基準でN=31°～Wである。

【堆積土】15層に分層された。1～5層は住居堆積土、6～9層はカマド堆積土、10層はカマド袖構築土、11層はIV層土ブロックを含む周溝堆積土、12・13層はカマド掘り方堆積土で、このうち12層は被熱部分である。14層は貼り床、15層は掘り方堆積土である。住居堆積土3層には多量の炭化物が含まれており、この層から遺構検出面にかけて土師器・須恵器ほか多数の遺物が出土した。1・2層を上層、3層を中層、4・5層を下層とし遺物の取り上げを行った。

【壁面】検出された範囲の壁面は、北・南壁では直立、東壁はやや外傾、西壁は直立して立ち上がる。残存する壁高は8～30cmである。

【床面】14層上面を床面とする。起伏が認められるが概ね平坦である。

【柱穴】21基検出された。P2・6・7・11・15で柱痕跡が認められた。P2・11は配置位置や規模などから主柱穴と考えられ、P6・7・15は壁柱穴と考えられる。P1・3・4は堆積土に多量の焼土や炭化物・焼骨を含むもので、カマド関連のビットか「灰溜め」ビットと考えられる。P12・20・21は住居の中央付近で検出される。比較的同じ規模のビットで、住居カマド軸方向に並び配される。

【周溝】検出された範囲ではカマド付近では認められなく、北東コーナーでは壁より10cm程度離れ検出される。また、このほかでは壁面に沿って検出される。規模は幅16～36cm、深さ7～17cmを測り、断面形状は逆台形やU字形を呈する。

【カマド】北壁中央部に位置し、壁面には直交して付設される。袖部の規模は、西袖は基部がP61に切られるため残存する長さ30cm、幅13～27cm、東袖が長さ87cm、幅20～32cmを測り北壁に直交して伸びる。燃焼部の規模は幅67～70cm、奥行き94cmを測る。西・東・奥壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、中央東寄りに28×32cmを測る被熱部分を認める。

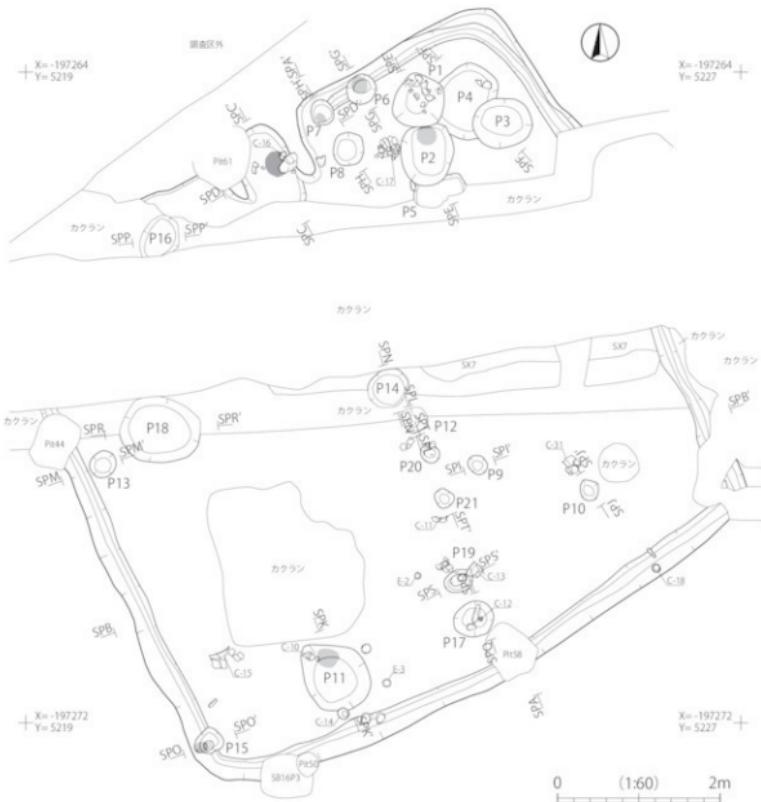
【出土遺物】土師器環11点、高環2点、小型土器1点、甕8点、須恵器環蓋3点、土錐1点、刀子1点を図示した。



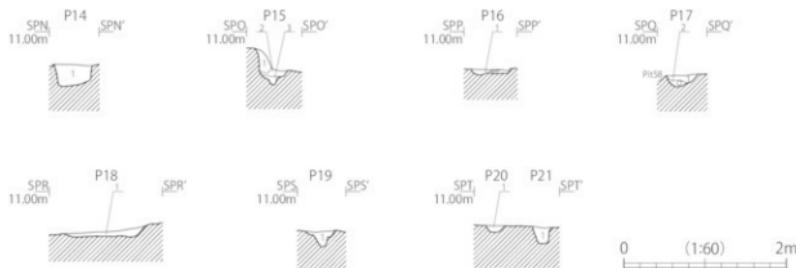
第21図 SI42A 穫穴住居跡 (1)・SI42A～C 穫穴住居跡断面図

SI42A 竪穴住居跡 埋蔵土註記表

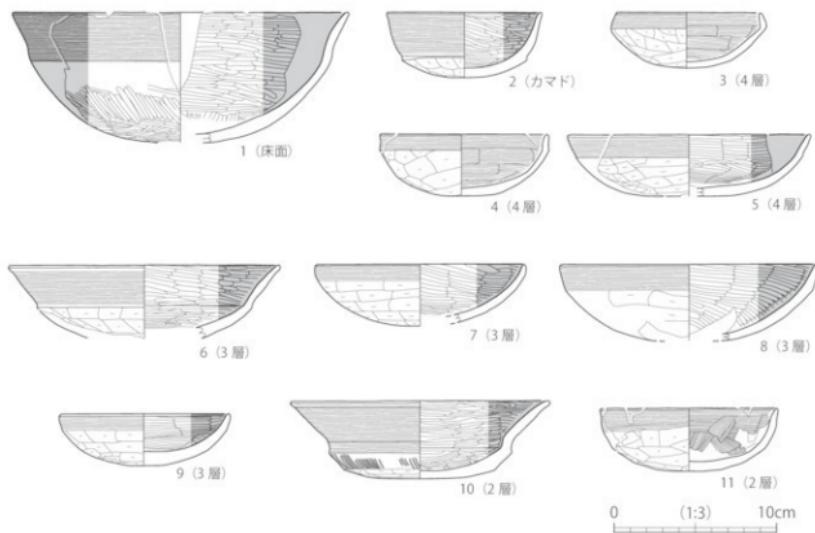
深位	層位	土色	土性	備考
住居堆積土	1	10W4/2 灰黃褐色	砂質シルト	黒色土粒多量、炭化物微量含む。
	2	10W4/4 黄褐色	砂質シルト	黒色土粒少額、炭化物微量含む。木刷の下部に多量の遺物が出土する。
	3	10W2/1 黑色	シルト	古削土粒ブラック(30~40mm程度)多量、炭化物少額、燒土粒・炭化物ラミナ状に含む。
	4	2.5Y5/2 暗黄褐色	砂質シルト	黒色土粒少額、燒土粒・炭化物微量含む。
	5	10W3/2 黑褐色	砂質シルト	古削土粒少額、炭化物微量含む。
カマド	6	10W4/3 にぶい 黄褐色	砂質シルト	燒土ブロック(5~25mm程度)多量、燒土粒少額、炭化物微量含む。
	7	10W3/3 暗褐色	砂質シルト	古削土粒少額、燒土粒・炭化物微量含む。
	8	7.5Y3/3 暗褐色	シルト	燒土ブロック(5~10mm程度)多量、粘土ブロック(5~10mm程度)・炭化物少量含む。
	9	10W4/4 にぶい 黄褐色	シルト	古削土粒・燒土粒少額、炭化物微量含む。
カマド廻り	10a	7.5Y4/3 黄褐色	シルト	燒土粒・炭化物微量含む。
	10b	7.5Y4/2 黄褐色	シルト	古削土粒ブロック(10mm程度)少量含む。
	10c	10W6/2 灰黄褐色	砂質シルト	燒土ブロック(5~10mm程度)多量、炭化物微量含む。
廻溝	11	10W4/2 灰黄褐色	シルト	古削土粒・焼土粒(10mm程度)多量、炭化物微量含む。
	12	10W5/2 灰黄褐色	シルト	炭化物微量含む。(加熱部分)
	13	10W4/3 にぶい 黄褐色	シルト	燒土粒微量含む。
貼り床	14a	10W4/2 灰黄褐色	シルト	古削土粒ブロック(10mm程度)多量、炭化物微量含む。
	14b	10W6/6 明黄褐色	シルト	6明ナットブロック(10~20mm程度)・焼土ブロック(5~10mm程度)多量、燒土粒・炭化物微量含む。
住居廻り方	15	10W5/6 淡褐色	粘土質シルト	古削土粒ブロック(5~30mm程度)多量、炭化物微量含む。



第22図 SI42A 竪穴住居跡 (2)



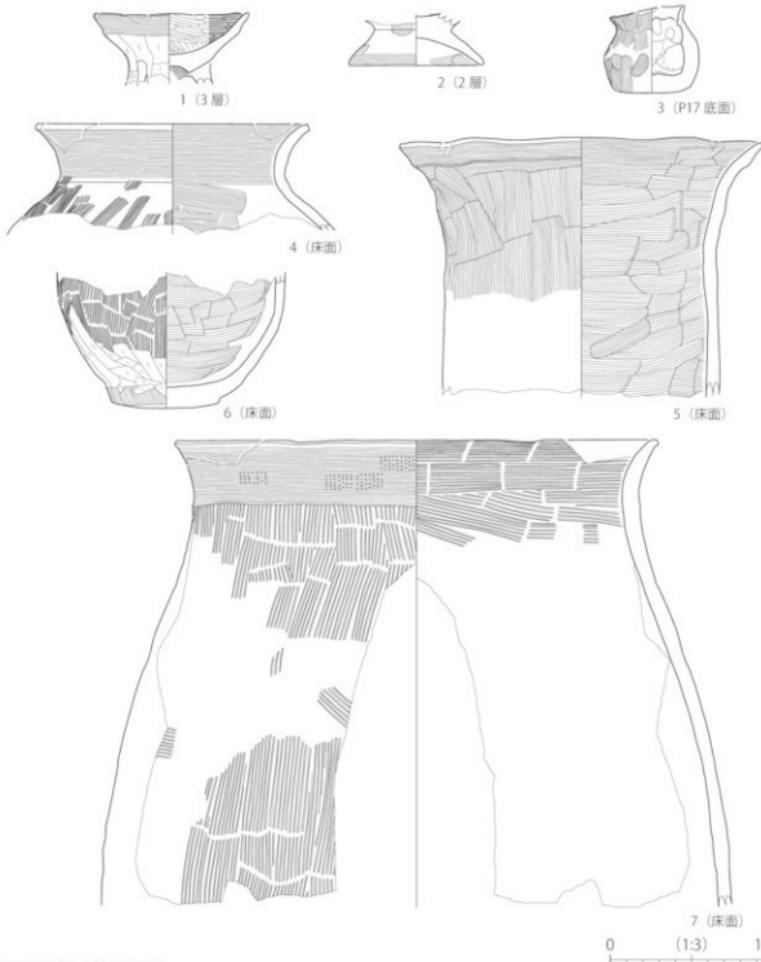
第24図 SI42A 穫穴住居跡(4)



SI42A 穫穴住居跡出土遺物調査表(1)

回収 番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量(cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 回数
						口径	底径	高さ				
1	C 10		床面	土師器	环	(20.8)	-	(8.0)	口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、黒色處理	ヘラミガキ、黒色處理		9.12
2	C 16	カマF	堆積土	土師器	环	(9.6)	-	4.0	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理		9.13
3	C 18		4層(下層)	土師器	环	9.0	-	3.4	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ		9.14
4	C 19		4層(下層)	土師器	环	(10.4)	-	3.8	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ		9.15
5	C 20		4層(下層)	土師器	环	(15.0)	-	3.8	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理		9.16
6	C 22		3層(中層)	土師器	环	(16.8)	-	-	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理		9.17
7	C 23		3層(中層)	土師器	环	13.0	-	(3.8)	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理		9.18
8	C 24		3層(中層)	土師器	环	16.0	-	(4.7)	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理		9.19
9	C 26		3層(中層)	土師器	环	10.6	-	3.2	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理		9.20
10	C 27		2層(上層)	土師器	环	16.0	-	4.8	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理		9.21
11	C 29		[2層(上層)]	土師器	环	(10.8)	-	3.9	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ		9.22

第25図 SI42A 穫穴住居跡出土遺物(1)



SI42A 穴住居跡出土遺物解説表 (2)

固有 番号	登録番号	出土地点	層 位	種 類	器 種	法量 (cm)	外観調整			内面調整	備 考	写真 箇所
							口径	底径	高さ			
1	C-25		3層(1中層)	土器	高环	(9.5)	-	-	口縁部ヨコナデ。体部~脚部ヘラケヌリ 引	ヘラミガキ、黒色処理。脚部ヘラ ナデ	脚部透かし 孔有り	10-1
2	C-28		2層(上層)	土器	高环	-	8.3	-	脚部ヘラナデ。脚部ヨコナデ	体部ヘラミガキ、黒色処理。脚部 ヘラナデ	体部~脚部	10-2
3	C-12	P17	底面	土器	小型土器	4.6	4.4	5.4	ヘラナデ	脚部直角		10-3
4	C-11		床面	土器	直角	(16.6)	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ヘラケヌリ	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ		10-4
5	C-13		床面	土器	直角	(22.4)	-	-	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ	口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ		10-5
6	C-14		床面	土器	直角	6.6	-	-	ヘラナデ・ハケヌリ・ヘラケヌリ ヘラナデ	ヘラナデ		10-6
7	C-15		床面	土器	直角	(29.5)	-	-	口縁部ハナメ・ヨコナデ。体部ハケヌリ	口縁部ハケヌリ		10-7

第 26 図 SI42A 穴住居跡出土遺物 (2)

SI42B 竪穴住居跡（第 21・28～30 図）

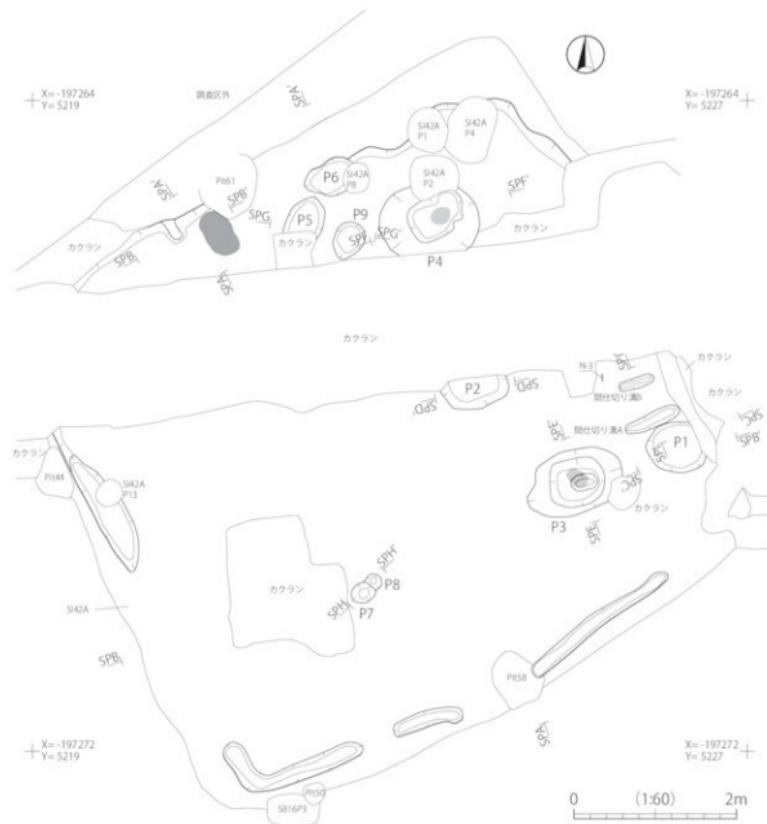
【位置・確認】 2・4・5・7・8 グリッドに位置する。SI42A 掘り方調査中に別な床面をもつ遺構を検出しこれを SI42B とした。

【規模・形態】 検出された範囲の規模は、南北 706cm、東西 709cm を測る。平面形状は方形を呈するものと推測する。
【方向】 カマド基準で N=30°—W である。

【堆積土】 7 層に分層された。1・2 層はカマド堆積土で焼土ブロックや炭化物・焼骨が含まれる。3 層はカマド袖構築上、4・5 層はカマド掘り方堆積土である。6 層は貼り床で、IV 層土や黒色土がラミナ状に含まれる 6a 層と白色粘土と黒色土が混合する 6b 層に分かれ。7 層は掘り方堆積土で IV 層土ブロックが含まれる。

【壁面】 掘り方で検出されたため不明である。

【床面】 SI42A 構築の際に削平を受けているため、床面の殆どは残存しないものと考えられ詳細は不明である。



第 28 図 SI42B 竪穴住居跡（1）

【柱穴】 9基検出された。P 3・4に柱痕跡が認められた。配置位置や規模などから主柱穴と考えられる。柱間寸法は 360cmである。他のものについては柱痕跡が確認できず、規模なども様々で柱穴であるか否かは不明である。

【周溝】 検出された範囲では南・西壁に沿って途切れながら検出される。規模は幅 14 ~ 40cm、深さ 2 ~ 7 cmを測り、断面形状は U字形を呈する。

【カマド】 北壁中央部やや西寄りに位置し、壁面にほぼ直交して付設される。西袖を検出する。規模は長さ 32cm、幅 20 ~ 24cmを測り北壁に直行して伸びる。西・奥壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、38 × 56cmを測る被熱部分を認める。

【その他の施設】 P 3 の東側で 2 条の間仕切り溝を検出した。南に位置する A の規模は長さ 70cm、幅 14 ~ 20cm、深さ 9 ~ 11cmを測る。A の北にこれに並行して検出される B の規模は長さ 45cm、幅 12 ~ 14cm、深さ 2 ~ 3 cmを測る。断面形状はいずれも U字形を呈する。

【掘り方】 検出された範囲では中央部が台形状に高まり、その周囲が 7 ~ 12cm掘り込まれている。

【出土遺物】 刀子 1 点を図示した。



SI42B 積穴住居跡出土遺物観察表

図版 番号	登録番号	出土地点	層位	種別	器種	法量 (cm)			備考	写真 図版
						残存長	厚さ	幅		
1	N-3		掘り方	金属製品	刀子	(11.2)	1.3	0.4		11-7

第 30 図 SI42B 積穴住居跡出土遺物

SI42C 積穴住居跡（第 21・31 図）

【位置・確認】 2・4・5・7・8 グリッドに位置する。SI42A 掘り方調査中に、新たなプランを検出しこれを SI42C とした。

【規模・形態】 検出された範囲の規模は、南北 560cm、東西 610cmを測る。平面形状は北西側が搅乱により検出できなかったが方形を呈するものと推測する。

【方向】 東壁基準で N—22°—W である。

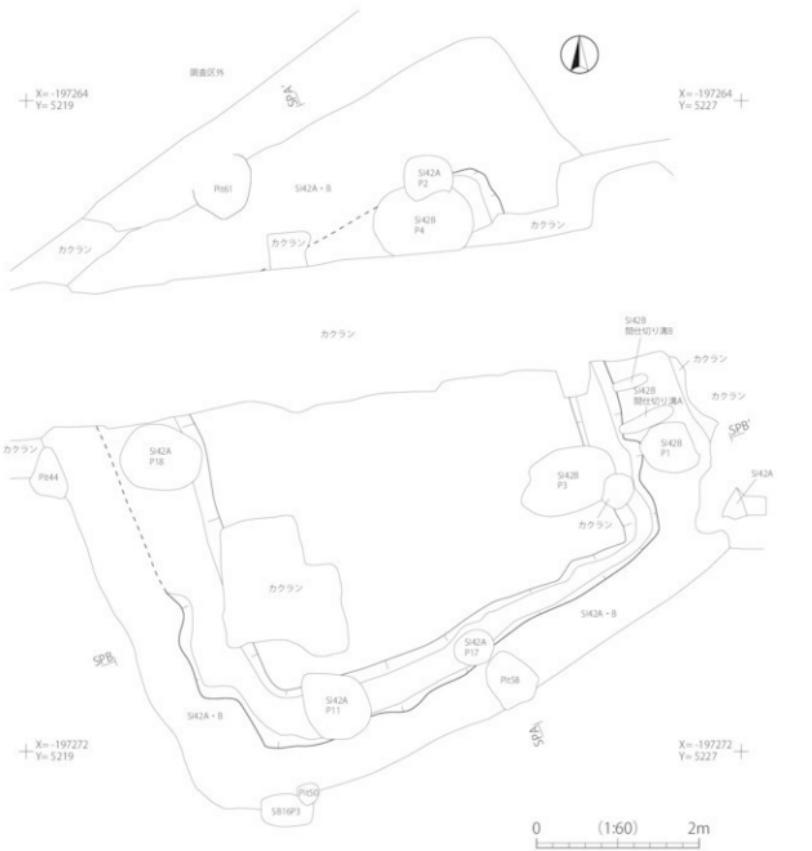
【堆積土】 掘り方堆積土のみ残存し单層である。

【壁面】 掘り方で検出されたため不明である。

【床面】 掘り方で検出されたため不明である。

【掘り方】 検出された範囲では中央部が台形状に高まり、その周囲が 8 ~ 20cm掘り込まれている。

【出土遺物】 掘り方堆積土から出土した遺物は無く詳細は不明である。



第31図 SI42C 竪穴住居跡

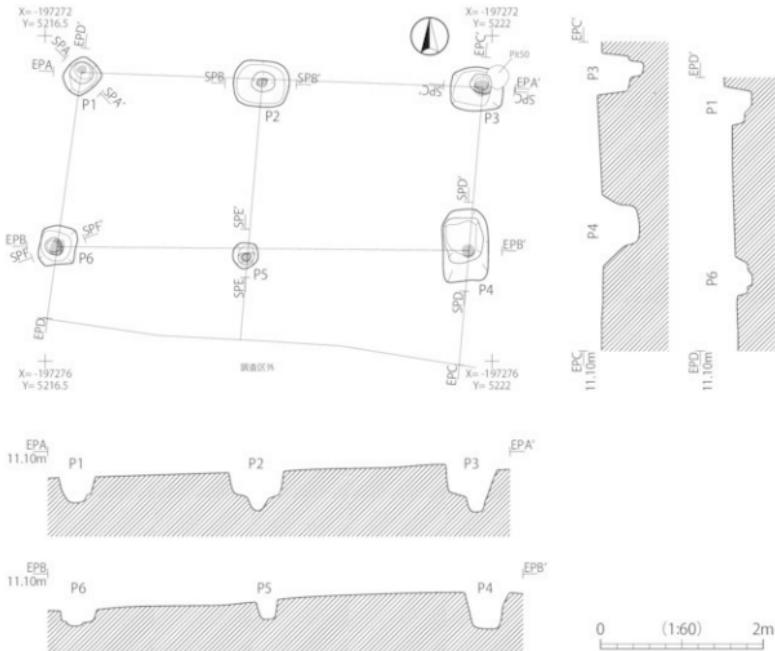
SI42C 竪穴住居跡 堆積土註記表

部位	層位	土色	主性	備考
住居敷き方	I	10YR5/8 黄褐色	粘土質シルト 堆積土粒・黒色土粒・褐色土ブロックの混在、鈍化鉄斑含む。	

(2) 掘立柱建物跡

SB16 掘立柱建物跡 (第33・34図)

調査区南西部、7・8・10・11 グリッドに位置し、SH13・36・42A、SD22 よりも新しい。6 基の柱穴が検出され、その全てで柱痕跡が認められた。検出された範囲では南北 1 間×東西 2 間の建物跡であるが、柱穴の配置状況などから南側が調査区外にかかると考えられる縦柱建物である。桁行は南北 200cm、東西 490cm で、柱間寸法は P 1—2 が 220cm、P 2—3 が 270cm を測る。棟方向は南北軸で N—4°—E である。柱穴の平面形は P 1～4・6 が隅丸方形で、規模は上端長が 46～86cm、深さは 20～60cm を測る。P 5 の平面形は円形で、上端径の規模は 31 cm を測り外周のものより小型である。いずれの柱穴も底面の標高値は 10.36～10.47 m に収まり、ほぼ近い値を示している。それぞれのピットの壁は直立して立ち上がるが、P 4 については壁の上部が外へ開いている。P 2～5 の堆積土中から土師器・須恵器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



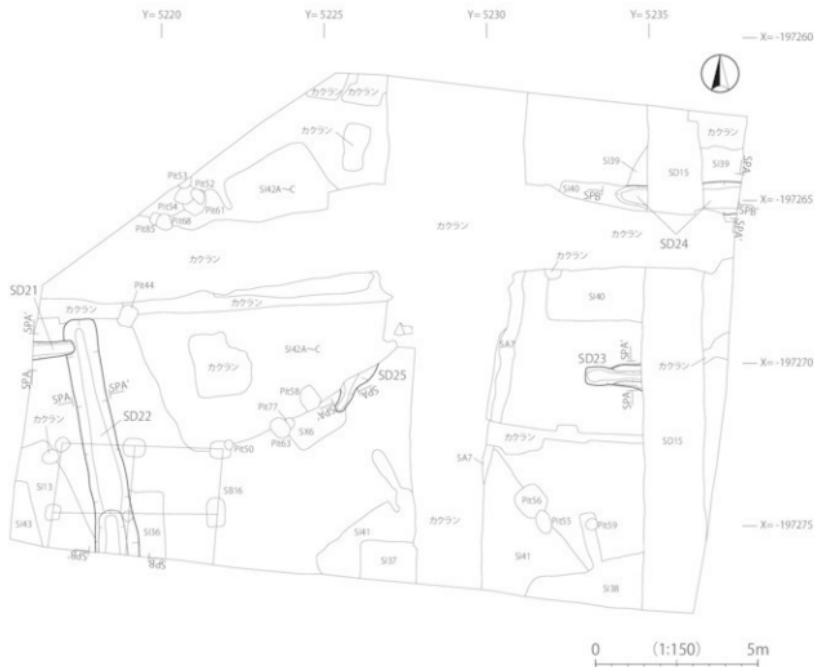
第33図 SB16 掘立柱建物跡 (1)

SD24 溝跡（第35・36図）

調査区北東部、3・6グリッドに位置する。SI39より新しく、SI40、SD15より古い。軸方向はN-89°-Eで、中央部がSD15と重複し、東側が調査区外にかかる。検出された規模は長さ3.6m、上端幅60~100cm、下端幅33~65cm、深さ15~37cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。堆積土中から土師器・須恵器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

SD25 溝跡（第35・36図）

調査区中央部、8グリッドに位置する。SX 6より新しく、SI42Aよりも古い。軸方向はN-25°-Eで、北部がSI42と重複する。検出された規模は長さ1.9m、上端幅30~44cm、下端幅14~22cm、深さ15~22cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。堆積土中から土師器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



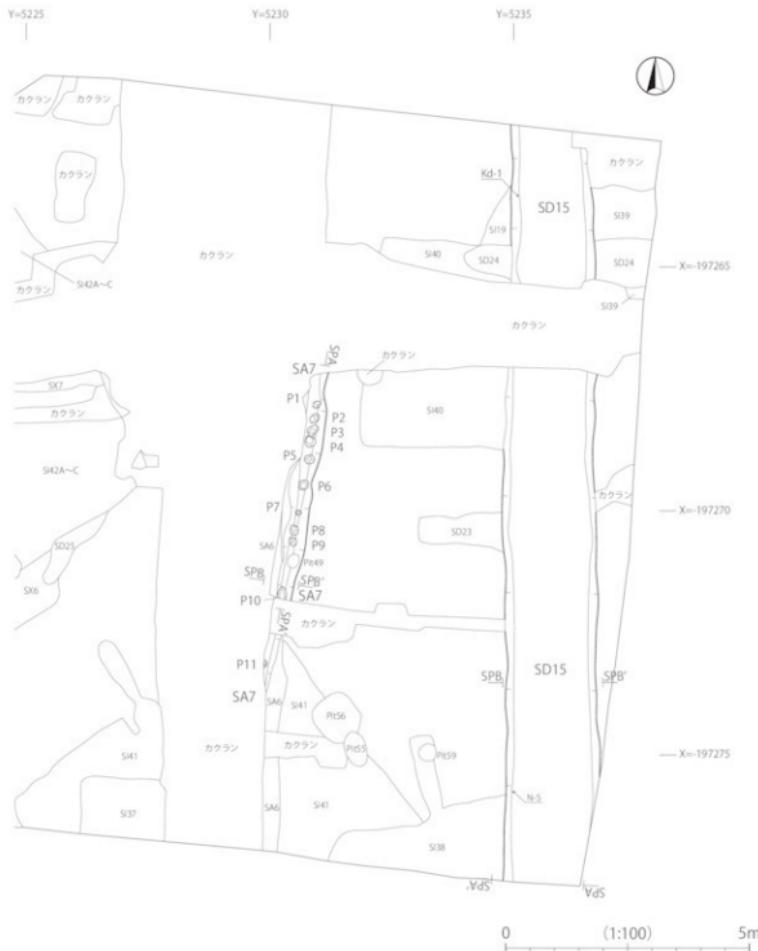
SD21~25 溝跡 調査表

溝跡名	Y' (m)	方向	規模 (cm)	備考	重複				
					長さ	上幅	下幅	深さ	
SD21	4	N-82°-E	130	43~54	28~32	28~30			SD22より古い。
SD22	4+7+10	N-82°-11°-W	720	100~132	30~73	47~66			SI13~26, SD21より新しい。SB16より古い。
SD23	9	N-88°-W	170	54~80	12~35	8~11			P86より新しい。SD15より古い。
SD24	3+6	N-89°-E	360	60~100	33~65	15~37			SI39, P82より新しい。SI40, SD15より古い。
SD25	8	N-25°-E	190	30~44	14~22	15~22			SD6, P88~92より新しい。SI42Aより古い。

第35図 溝跡

(4) 区画施設

調査区東部において区画施設と考えられるSD15溝跡とSA7材木列跡それぞれ1条が南北方向に検出された。SD15は第167次調査で検出されたSD13溝跡(平成11年西台畠遺跡2次調査検出SD31溝跡)の西側に位置し、互いに北部では3m、南部では2m程度の間隔をもって並走するように検出された。断面形状は両遺構とも逆台形を呈し共通する点があるが、時間的に並行関係にあるかは詳らかにできない。SA7はSD15の西側に位置し、3.5~4.5mの間隔をもつ。軸方向が真北より10°東へ振れて検出される。



第39図 SD15溝跡・SA7材木列跡

SD15 溝跡（第39～42図）

調査区東部、3・6・9・12グリッドに位置する。第167次調査で検出され、ここではSI23・24よりも新しい溝であることが確認された。また、今年度の調査区ではSI38・39、SD23・24よりも新しく、SI40よりも古いことが確認された。軸方向はN-1°-Wである。検出された規模は長さ15.4mを測り、平成17年の調査区からの長さを含めると総長19mを超える。上端幅は165～193cm、下端幅125～167cm、深さ44～70cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。底面は北から南へ傾斜が認められ、標高は北部で10.40m、南部では10.20mである。堆積土は4層に分層され、このうち4層は人为的に埋め戻されたものと考えられる。土師器壺3点、甕1点、須恵器蓋1点、石製鋤鍤車1点、鉄鎌1点、刀子1点を図示した。



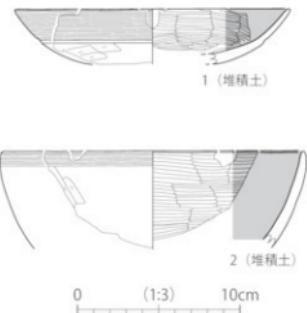
SD15 溝跡 堆積土記載表

道耕名	層位	土 色	土 性	備 考
SD15	1	BOYR4/2灰黃褐色	シルト	NH土粒多量含む。
	2	BOYR4/2灰黃褐色	シルト	NH土粒少量、炭化物微量含む。
	3	BOYR4/2灰黃褐色	シルト	炭化物少量、瓦礫ナットロック(5～10mm程度)微量含む。
	4a	BOYR4/2灰黃褐色	粘土質シルト	NHナットロック(5～30mm程度)多量、砂土粒・炭化物少量含む。(人为的埋土)
	4b	BOYR4/2灰黃褐色	粘土質シルト	NHナットロック多量、炭化物少量含む。(人为的埋土)
	4c	BOYR4/2灰黃褐色	粘土質シルト	NHナットロック・灰褐色ナットロック(各10～40mm程度)を多量、炭化物微量含む。(人为的埋土)

SD15 溝跡 破片表

道耕名	方位	断面 (cm)			備 考	重複
		長さ	上幅	下幅		
SD15	N-1°-W	15.40	165～193	125～167	44～70	SI38・39、SD23・24より新しい、SI40より古い。

第40図 SD15 溝跡断面



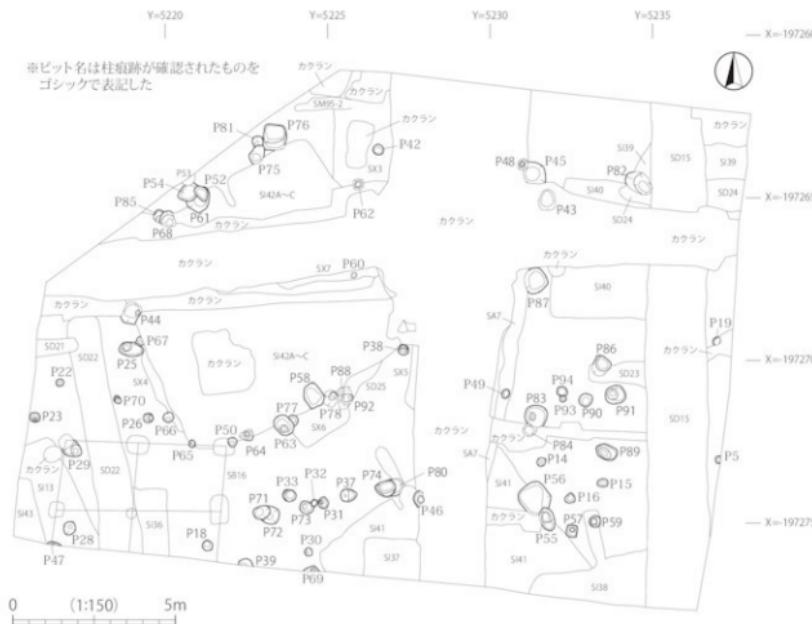
第41図 SD15 溝跡出土遺物 (1)

SA7 材木跡跡 ピット調査表

遺構名	平面形	周縁(cm)	層位	土色	土性	備考
P1	円形	17×14	14	I	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト I/V層土粒・灰褐色シルト粒多量含む。
P2	楕円形	21×16	5			
P3	楕円形	25×17	8			
P4	円形	24×20	4			
P5	円形	22×17	3			
P6	円形	19×19	2			
P7	円形	11×10	28	I	10YR3/1 黒褐色	粘土質シルト I/V層土粒・灰褐色シルト粒多量含む。
P8	円形	20×16	2			
P9	円形	16×14	3			
P10	楕円形	23×18	5			
P11	円形	12×7	16			

(5) ピット(第44図)

ピットは69基検出された。調査区内で特に集中域等は見られず全域で検出された。規模、深さとも定まったものではなく、平面形も円形、楕円形、隅丸方形と様々である。遺構検出面や底面で柱痕跡を検出したものもあり、柱穴と確認できたものもある。ピット同士や他の遺構と重複するものがあり、新旧様々なピットが混在しているものと考えられる。最大規模のものはP56で、長軸95cm、短軸89cm、深さ18cmを測る。多数のピットの堆積土中から土器・須恵器などが出土しているが、いずれも細片のため図示し得なかった。



第44図 ピット

SX 4 性格不明遺構（第 45 図）

調査区西部、4・7・8 グリッドに位置する。SI42A より古い。平面形は不明である。方向は西壁基準で N—27°—W である。検出された範囲の規模は長さ 283cm、幅 35cm、深さ 13～25cm を測る。壁は外傾して立ち上がり、底面には窪みが見られる。堆積土中から土師器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。

SX 5 性格不明遺構（第 46 図）

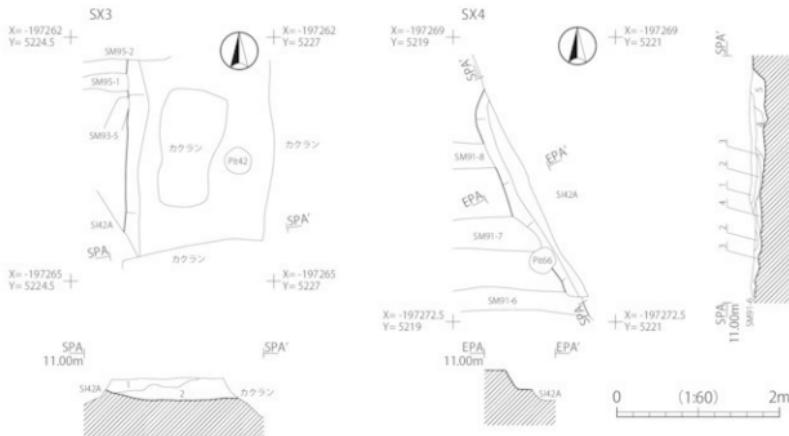
調査区中央部、5・8 グリッドに位置する。北・東側が擾乱により失われ、平面形は不明である。方向は西壁基準で N—7°—E である。検出された範囲の規模は長さ 198cm、幅 30cm、深さ 5～8cm を測る。壁は外傾して立ち上がり、底面には窪みが見られる。遺物は出土していない。

SX 6 性格不明遺構（第 46・47 図）

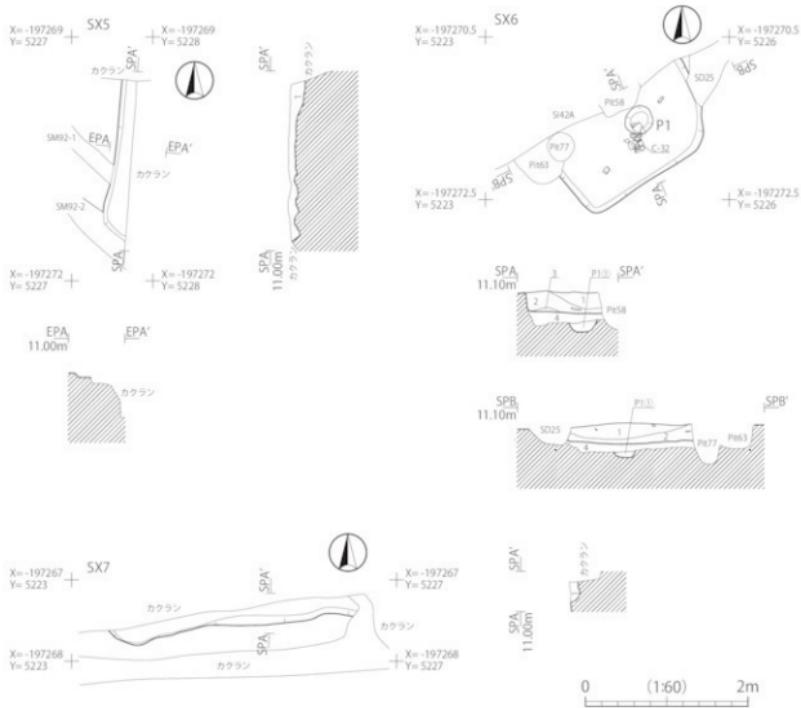
調査区中央部の 8 グリッドに位置する。遺構底面に貼り床や硬化面、周講、カマドが確認できなかつたため性格不明遺構とした。SI42A、SD25 より古い。検出された状況により平面形状は隅丸方形を呈するものと推測する。方向は西壁基準で N—40°—W である。検出された範囲の規模は、南北 120cm、東西 203cm、深さ 14～19cm を測る。堆積土は 4 層に分層された。1～3 層は遺構堆積土、4 層は掘り方堆積土である。検出した範囲の壁面は直立気味に立ち上がる。4 層上面は底面で概ね平坦である。ピットは掘り方で 1 基検出された。性格は不明である。掘り方では検出した範囲では中央部が台形状に高まり、その周囲が 14～19cm 掘り込まれている。土師器 1 点を図示した。

SX 7 性格不明遺構（第 46 図）

調査区中央部、5 グリッドに位置する。SI42A より新しい。方向は南壁基準で N—82°—E である。北と東部が擾乱により失われる。検出された規模は長さ 310cm、幅 24cm、深さ 5～13cm を測る。壁は外傾して立ち上がり、底面には起伏が見られる。堆積土中から土師器が出土しているが、細片のため図示し得なかった。



第 45 図 SX 性格不明遺構（1）



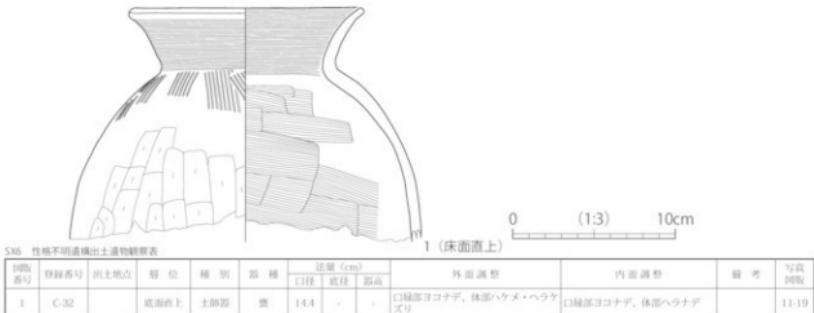
SX3～7 性格不明透構 破壊帯

透構名	平面形	最深(m) [長軸×短軸]	層位	土色	土性	備考	重複
SX3 不明	(243) × (180)	10～ 21	1	7.3YR4/2灰褐色	砂質シルト	Iv層土ブロック (5～15mm程度) 少量。炭化物微量含む。グライ化する。	P62より新しい。 SI42A、P42より古。
			2	10YR5/1褐色	砂質シルト	Iv層土ブロック (20～100mm程度) 多量。粘土粒・炭化物微量含む。グライ化する。	
SX4 不明	(283) × (35)	13～ 25	1	10YR4/2灰褐色	砂質シルト	Iv層土ブロック含む。	
			2	10YR6/6明褐色	シルト	褐色土ブロック (20～40mm程度) 多量含む。	
			3	10YR3/2黒褐色	シルト	Iv層土ブロック・炭化物微量含む。	SI42A、P46より古。
			4	2.5Y4/1褐色	シルト	褐色土ブロック含む。	
			5	10YR5/2灰褐色	砂質シルト	Iv層土ブロック (50mm程度) 多量含む。	
SX5 不明	(198) × (30)	5～8	1	10YR4/2灰褐色	砂質シルト	Iv層土多量、粘土粒少量含む。	—
SX6 調丸方形	(203) × (120)	14～ 19	1	10YR4/3にぶい・黃褐色	シルト	Iv層土ブロック (10～50mm程度) 多量。粘土粒・炭化物・酸化鉄含む。	P78+88+92より 新しい。SI42A、 SI25、P58+63+77 より古い。
			2	10YR3/4暗褐色	シルト	Iv層土・炭化物少量。粘土粒・鐵土粒微量含む。	
			3	10YR5/3にぶい・黃褐色	シルト	Iv層土ラミナ状に含む。	
			4	2.5Y4/2暗灰褐色	粘土質シルト	粘土ブロック (5～10mm程度) 多量。鐵土ブロック (10～50mm程度) 少量。炭化物・鈣長石微量含む。	
SX7 不明	(310) × (245) ～ 13	1	10YR4/3暗褐色	砂質シルト	Iv層土ブロック (5～10mm程度) 多量。炭化物少量、粘土粒微量含む。	SI42A、P46より新。 —	

SX6 性格不明透構 施設観察表

透構名	平面形	最深(m) [長軸×短軸]	層位	土色	土性	備考
P1 P1形	33 × 34	16	(1)	10YR4/3にぶい・黃褐色	シルト	砂質上ブロック少量、鐵土ブロック・炭化物・鈣長石微量含む。

第 46 図 SX 性格不明透構 (2)



第47図 SX6 性格不明遺構出土遺物

3. 出土遺物について

今回の調査で基本層Ⅲ層や遺構から出土した遺物は、種別として土師器・須恵器・石製品・金属製品・土製品などがある。ここでは図示した土師器・須恵器について特徴を記載する。

(1) 土師器

土師器はロクロを使用せずに製作されたもので、器種には壺・甕・高壺・鉢・小型土器がある。

〈壺〉 内面が黒色処理されるものと、内面がナデ調整されるものがあり、器形や調整などに違いがみられる。内面が黒色処理されるものは、口縁部と体部の境に段や稜をもつもの、口縁部が外反気味になるもの(第25図1・6・10)と口縁部が直線的に外傾するものがある。前者の第25図1は内外面ともに黒色処理され、外面は口縁部がヨコナデ、底部はヘラミガキ調整が施されている。後者は段や稜の位置が上位にあるもの(第20図1、第25図5・8)、中位にあるもの(第9図1、第41図1)、下位にあるもの(第12図1、第25図2)がある。その他、口縁部と体部の境に段や稜が中位に位置し、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(第9図2)や口縁部と体部に稜や段を有さず、半球形の形態を有するもの(第25図7・9、第37図1、第38図1、第41図2)がある。第37図1は体部ヘラケズリの後ミガキによる調整が施されている。内面がナデ調整されるものは、「関東系土師器」あるいは「関東系土器」と称されるもので、口縁部の形態、体部の段や稜の有無などに違いがみられる。口縁部が短く直立気味に立ち上がり口縁部と体部の境に段をもつもの(第25図4・11)と口縁部に屈曲がなく半球形の形態を有するもの(第41図3)、口縁部が直線的に内側に傾くもの(第25図3)がある。これらの土器は口縁部の内外面にヨコナデ、体部の内面にヘラナデ調整が施される。

〈甕〉 長胴形のものと、胴張り形のものがある。長胴形のものは、体部外面が主にハケメ調整のもの(第27図3、第41図4)と主にヘラナデ調整のもの(第9図3、第17図1、第26図5)がある。胴張り形のものは、体部外面の調整が主にハケメ調整のもの(第26図4・7、第27図1)と主にヘラケズリ調整のもの(第27図4)、上半がハケメ、下半がヘラケズリ調整のもの(第47図1)がある。

〈高壺〉 脚部に窓があるものと、窓がないものがある。脚部に窓を有するものは、脚部外面ヘラケズリ、根部外面ヨコナデ調整が施されるもの(第14図1)や口縁部に段を有しヨコナデ調整され、体部から脚部にかけてヘラケズリ調整が施されるもの(第26図1)がある。脚部に窓が無いものは、内面が黒色処理されるもの(第26図2)がある。

〈鉢〉 口径に比して器高が低く口縁部が屈曲する形態で、口縁部外面ヨコナデの後ミガキ、体部外面ヘラナデが施されるもの(第20図2)。

〈小型土器〉 外面口縁部・体部がナデ調整され、内面は指頭圧痕によるもの(第26図3)。

(2) 須恵器

須恵器は高台付坏・蓋・壺、細片で図示しなかったが表がある。

＜高台付坏＞ 底部が丸みをもち、体部下端が屈曲し、直線的に立ち上がるもの（第17図2）。

＜蓋＞ 内面にカエリのあるものと、カエリがないものがある。内面にカエリがあるものは、宝珠形のツマミをもつもので、天井部分が平坦となるもの（第27図7）がある。内面にカエリがないものは、端径10.2cm、器高4.6cmで天井部が山形になるもの（第27図5）や端径9.7cm、器高3.4cmで天井部が窪み、輪積み痕が残され、体部には僅かに段をもつもの（第27図6）がある。このうち第27図6の天井部内面には赤彩の可能性がある痕跡が認められる。

＜壺＞ 壺の肩部破片で、漆被膜が外面と内面全体に付着しているもの（第38図2）。

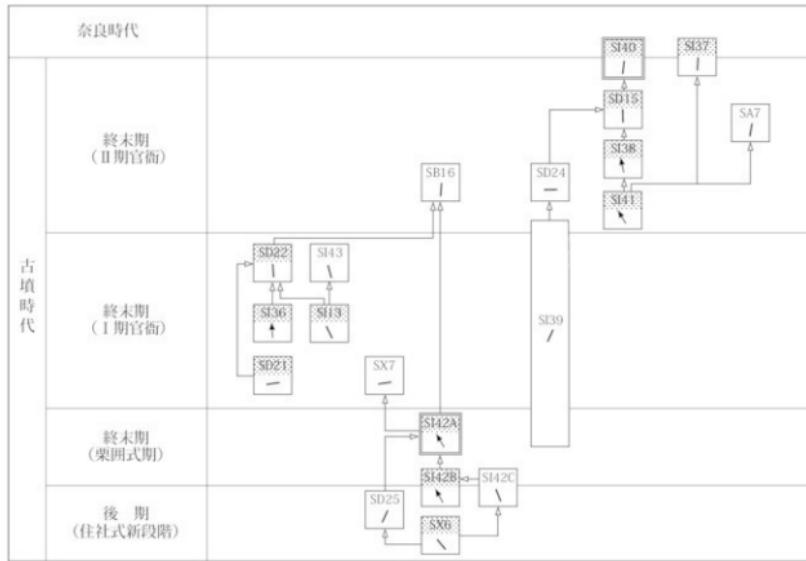
第VI章　まとめ

今回の調査により11軒の竪穴住居跡が検出された。これらは、遺構の重複関係や住居跡の形態、住居跡床面や堆積土中より出土する土師器・須恵器などから時期は、6世紀末葉から8世紀前葉と考えられる。また、掘立柱建物跡・溝跡・区画溝跡・木材列跡・性格不明遺構などの時期も同様と考えられる。土器の特徴等により本調査区に接する郡山遺跡（仙台市教育委員会2005ほか）や、西台畠遺跡（同2010b）、長町駅東遺跡（同2007aほか）や、沼向遺跡（同2010c）の年代観とほぼ合致するものである。以下竪穴住居跡についてまとめた。

（1）カマドはSI36・38・41・42A・42B住居跡で検出された。付設位置は全て北壁のほぼ中央に存在する。袖部はSI36では検出されなかったが、SI38・42A・42Bでは盛土により構築される。またSI41は袖部の下部にIV層を掘り残して基底部とし、その上に盛土を行い、さらに芯材として袖石を用いている。燃焼部はカマドを検出した住居跡全ての壁内側に付設され、底面には被熱部分が認められた。煙道部はSI38・41で検出された。長さはSI38が174cm、SI41は142cmである。このほかにSI38はカマド付近の壁がほぼ均一な土壤で埋め戻されており、さらに煙道部底面には浅い溝状の掘りこみが検出されていることから、煙道部分やカマドの造り替えがあった可能性が指摘できる。

（2）建て替えのある住居跡が検出された。SI42AはSI42Bの北東側を40cm、南側を10cm、南西側を20cm程度拡張しており、カマドの付設位置は両住居跡とも北壁のほぼ中央に構築され、さらにカマド軸方向もほぼ同方向を指向することで共通する点が見出された。SI42Aの貼り床面はSI42B貼り床上に重層する部分もある。また両住居跡北東側の主柱穴の柱痕跡は、それぞれの住居跡の北壁より75cm、東壁より105cmに位置しており、壁の立ち上がりからの距離が同じ位置となる。住居建て替えの際に同じ規格の元に柱を据えた可能性が考えられる。

（3）住居跡と他の遺構との重複状況は次のようになる。調査区北東部では古SI39→SD24→SD15→SI40新、東南部で古SI41→SI37・38→SD15新の変遷が確認される。また、中央部では古SX6→SD25・SI42C→SI42B→SI42A→SX7・SB16新、西部では古SI36・SI13・SD21→SD22・SI43→SB16新の変遷が確認された。重複状況から調査区東部ではSI39やSI41が古く、SI40が最も新しくなる。調査区中央や西部ではSX6やSI36などが古く、SB16やSX7が最も新しくなる。住居跡床面や床面上から出土する時期を特定できる土器は少ないがSI40・SI42Aなどがある。SI40では床面上層から土師器壺と須恵器高台付坏（第17図1・2）が出土する。このうち第17図2の高台付坏は郡山遺跡第117次調査のSX1768（仙台市教育委員会1999）からSI40の時期は、8世紀初頭と考えられる。SI42Aは床面から土師器壺・壺、須恵器蓋（第25図1、第26図4～7、第27図1・5・6）が出土している。市川橋遺跡伏石地区SD6517（宮城県教育委員会2009）から類似した須恵器蓋が栗圓式土器に伴って出土していることなどから、SI42Aの時期は7世紀前半と考えられる。



第 48 図 郡山遺跡第 200 次調査検出遺構時期別変遷模式図

参考文献

- 工藤信一郎 2010 「長町駅東道路・西台畠遺跡の集落について」『宮城考古学』第 12 号 宮城県考古学会
 古代土器研究会 2005 「宮城県中央部」東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編－<宮城> 東北古代土器研究会
 仙台市教育委員会 1992 「郡山遺跡—第 65 次発掘調査報告書一」仙台市文化財調査報告書第 156 集
 仙台市教育委員会 1999 「郡山遺跡 XIX—平成 10 年度発掘調査概報一」仙台市文化財調査報告書第 234 集
 仙台市教育委員会 2001 「郡山遺跡—第 124 次発掘調査報告書一」仙台市文化財調査報告書第 251 集
 仙台市教育委員会 2004 「郡山遺跡 24—平成 15 年度発掘調査概報一」仙台市文化財調査報告書第 251 集
 仙台市教育委員会 2005 「郡山遺跡発掘調査報告書一総括編（1）—」仙台市文化財調査報告書第 283 集
 仙台市教育委員会 2007 「長町駅東道路第 4 次調査」仙台市文化財調査報告書第 315 集
 仙台市教育委員会 2008 「長町駅東道路第 1・2 次調査」仙台市文化財調査報告書第 324 集
 仙台市教育委員会 2008b 「南小泉遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第 326 集
 仙台市教育委員会 2009 「長町駅東道路第 3 次調査」仙台市文化財調査報告書第 340 集
 仙台市教育委員会 2010 「郡山遺跡第 144 次調査」仙台市文化財調査報告書第 358 集
 仙台市教育委員会 2010b 「西台畠遺跡第 1・2 次調査」仙台市文化財調査報告書第 359 集
 仙台市教育委員会 2010 「沼向遺跡第 4～34 次調査」仙台市文化財調査報告書第 360 集
 宮城県教育委員会 2009 「市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区一惧沼「泉一堀並線」関連調査報告書Ⅵ—」宮城県文化財調査報告書第 218 集
 村田晃一 2002 「7 世紀集落研究の視点（1）」『宮城考古学』第 4 号 宮城県考古学会
 村田晃一 2007 「V. 宮城県中部から南部」「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」東北学院大学文学部
 柳澤和明 2010 「多賀城市山王・市川橋遺跡における住居式～豪華式期集落の様相」『宮城考古学』第 12 号 宮城県考古学会

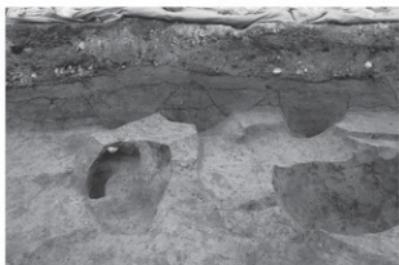
写 真 図 版



古代～中世遺構全景（東から）



SM91 全景（東から）



SM94 断面（南東から）



SA6 桧痕跡検出状況南側（西から）



SA6 桧痕跡断面（西から）



古墳時代～古代遺構全景（東から）



古墳時代～古代遺構全景（南東から）



古墳時代～古代遺構全景（南西から）



調査区南壁断面東側（北から）



SI13 全景（北東から）



SI36 全景（東から）



SI36 カマド断面（西から）



SI36 遺物 (C-4) 出土状況（西から）



SI37 全景（南から）



SI37 掘り方全景（南から）



SI38 全景（東から）



SI38 カマド（南東から）



SI38 カマド断面（東から）



SI38 挖り方全景（東から）



SI39 全景（西から）



SI40 全景（北西から）



SI40 挖り方全景（北西から）



SI41 完掘全景（南東から）



SI41 カマド（南東から）



SI41 カマド遺物（C-8）出土状況（南東から）



SI41 挖り方全景（北東から）



SI42A 全景（南東から）



SI42A 全景（北東から）



SI42A 遺物出土状況（南から）



SI42A 断面 A 南側（北東から）



SI42A 断面 B 西側（南東から）



SI42A 断面 B 東側（南東から）



SI42A カマド（南東から）



SI42A-P1 断面・遺物出土状況（東から）



SI42A-P17 遺物出土状況（北東から）



SI42A～C 掘り方全景（北東から）



SI42B・C 断面 A 南側（北東から）



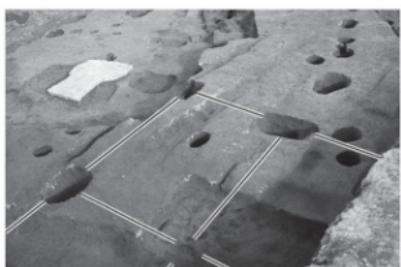
SI42B カマド（南東から）



SI42C 掘り方全景（南東から）



SI43 全景（北東から）



SB16 東半部（南西から）



SB16-P3 全景（北から）



SB16-P4 全景（東から）



SB16-P4 断面（東から）



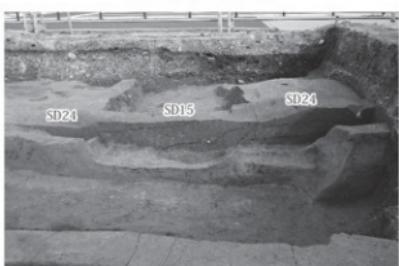
SD22 全景（北から）



SD22 断面（北から）



SD24 全景（南から）



SD15・24 断面（南から）



SD15 全景（南から）



SD15 断面（南から）



SD15 遺物 (Kd-1) 出土状況 (東から)



SD15 遺物 (N-5) 出土状況 (東から)



SA7 全景 (北から)



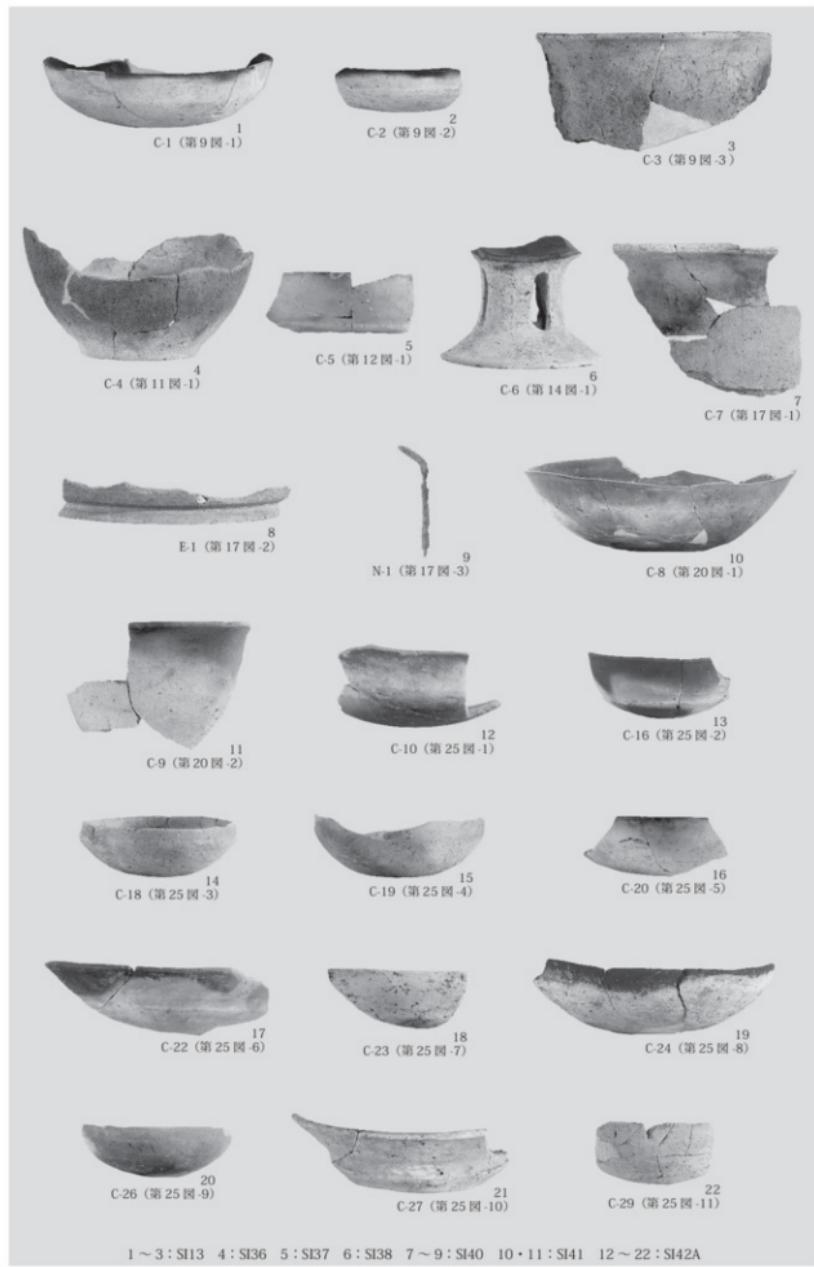
SA7 断面 (南から)



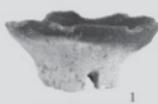
SX6 全景 (南東から)



SX6 掘り方全景 (北西から)



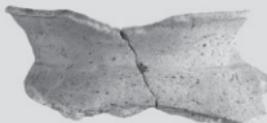
写真図版 9



C-25 (第26図・1)



C-28 (第26図・2)



C-11 (第26図・4)



C-12 (第26図・3)



C-13 (第26図・5)



C-17 (第27図・1)



C-14 (第26図・6)



C-21 (第27図・2)



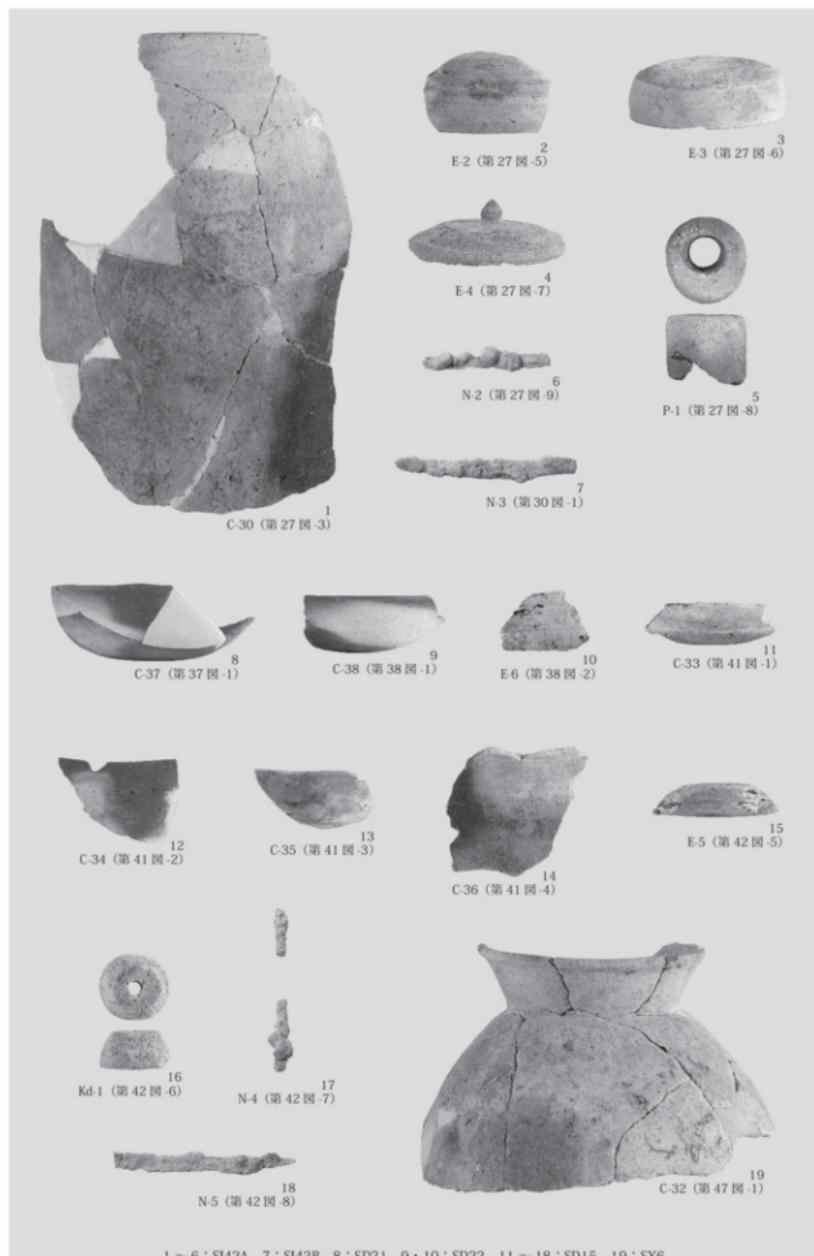
C-15 (第26図・7)



C-31 (第27図・4)

1~10: SH42A

写真図版 10



報 告 書 抄 錄

仙台市文化財調査報告書第391集

郡山遺跡第200次調査

—仙台市あすと長町21街区・店舗建設に伴う発掘調査報告書—

2011年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

〒980-8671 宮城県仙台市青葉区二日町1番1号
TEL022-214-8839 (文化財課)

印 刷 株式会社 仙 台 紙 工 印 刷

〒983-0036 宮城県仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14
TEL022-231-2245
